

【グラビア】

邦楽部会 発足記念コンサート(1)

2014年3月10日(月) すみだトリフォニーホール(小)



開演前の参加者&関係者による集合写真



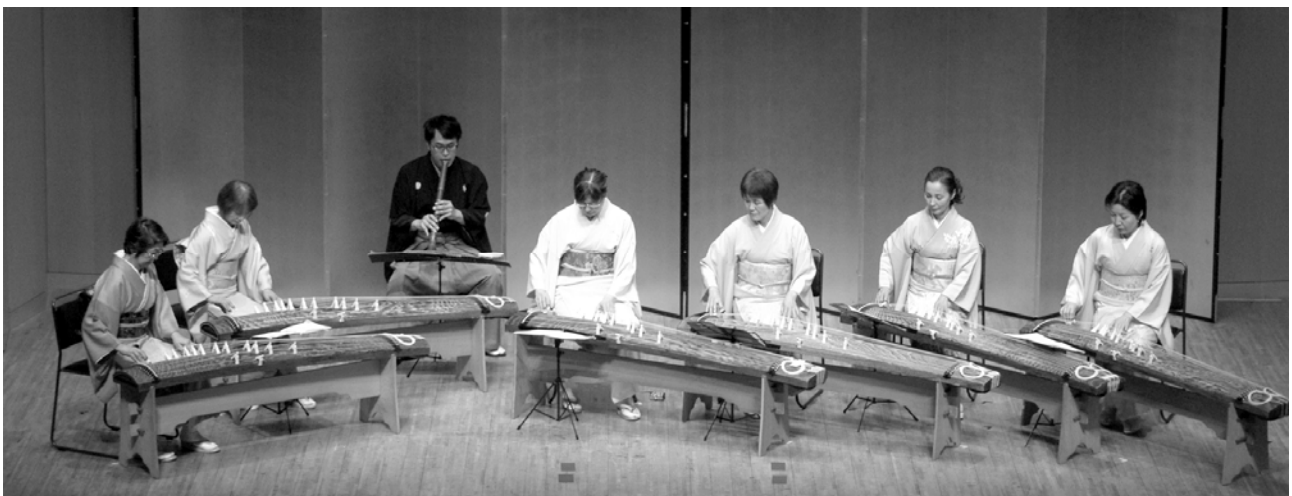
開演前の助川敏弥氏と二代目佐藤岡豊氏(右)



挨拶する助川氏



①一絃琴「今様」：高橋通



② 生田流箏曲「春の曲」(吉沢検校作曲) 演奏：高橋澄子、矢澤昌江、黒田静鏡(尺八)他

邦楽部会 発足記念コンサート(2)



③ 橋川琢編作曲「沙羅双樹」



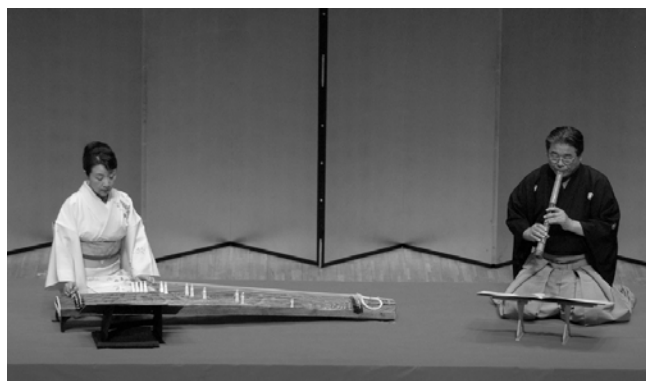
⑤ 山田流箏曲「都の春」



④ 高橋宏治作曲「Intermezzo」 演奏：邦楽四重奏団



⑥ 高橋通作曲「花と月と、、、春秋」



高橋雅光作曲「名月に寄せる詩＝名月に舞う」



長唄「越後獅子」 演奏 唄：東音野口賀功 三味線：杵屋静子、杵屋勝真代

音楽の世界

目次

ガラビア	邦楽部会発足記念コンサート		2
論壇	自分探し	中島 洋一	4
特集	Fresh Concert CMDJ2014 出演者に訊く		6
海外レポート	ロシア滞在記 (2)	惠藤 幸子	14
リレー連載	未来の音楽人へ (13)	斉藤 寿美代	18
コンサート・レポート	邦楽部会発足記念コンサート	助川 敏弥	23
連載			
	歌の道・我が音楽人生 (4)	久住 祐実男	24
	音・雑記—ひなの里通信— (67)	狭間 壮	26
	名曲喫茶の片隅から (48)	宮本 英世	28
	音盤奇譚 (53)	板倉 重雄	30
	電子楽器レポート・連載-15		
	【銀座オペラ Vol.2 ドニゼッティ“愛の妙薬”ハイライト】	阿方 俊	32
	人・アート・思考塾(2)	小西 徹郎	34
	明日の歌を～楽友邂逅点 (第 10 回) 追悼・今井重幸	橘川 琢	36
投稿	作曲代筆問題について	夏田 昌和	38
投稿	いま時の公共放送に思うこと	金藤 豊	39
音楽時評	科学、芸術における共同作業と、各々の拘り	夢音見太郎	40
	絶対音感を巡って (ロクリアン正岡 VS 編集長)		41
コンサート・プログラム	【Fresh Concert CMDJ2014】		44
コンサートチラシ	《Compotisions 2014》		55
コンサート・プログラム	【作曲部会 作品展2014】		56
CMDJ	会と会員の情報		65

「我々はどこから来たか、我々とは何か、我々はどこへ行くのか」この言葉をどこかで目にしていませんか。この言葉は、画家のポール・ゴーギャン(1848-1903)が、フランスを脱出してタヒチへ行き、そこで描いた大きな絵のタイトルです。「ああそうだ。真ん中に裸の男が立っていて、木の実のようなものをもぎ取ろうとしている絵だ。まわりに、少女、若い女、老女、そして青い像が描かれていたような気がする」その言葉とともに絵のイメージが浮かんで来たかもしれません。私はこの絵の実物をアメリカのボストン美術館で観ましたが、この絵と言葉は、NHKの番組「世界遺産 100」のタイトル CG として使われているので、多くの人々の記憶にあるのではないかと思います。

「我々人間とは何だ？自分とは何だ？」地球上の生物の中で、人間とは自分自身に向かって、このように問いかけをする唯一の存在なのかもしれません。多忙な生活に忙殺されている間は、そんな問いは忘れていますが、大きな困難や不幸に見舞われたりすると、「自分は一体何なのだ。自分は何のための生きているのだ」と激しく自問自答する時間がまた訪れます。人は、迷った時、目の前に大きな壁が立ち塞がった時、自分自身を、そして自分の生き方を改めて見つめ直し、進むべき新たな道を模索しようとするのでしょう。「自分探し」とは自分自身で自分の内面と向き合うことですから、本来、個人の課題でしょう。

しかし、我が国の多くの人々が自分の新しい生き方を求めて真剣に「自分探し」を行った時代がありました。それは、日本が第二次世界大戦に敗北し、人々が焼け野原の中から立ち上がろうとした時代です。これは私が少年の頃、大人達から聞いた話ですが、戦時中は食べるものもろくに手に入らず、出征して戦地に赴いても、内地に留まっても、いつ命を失うか分からない過酷な時代でしたが、国難の時だからこそ、みんなで助け合い支え合い結束して国難を乗り切ろうと、持てる人は、持てない人に自分の物を与え、一緒に頑張ったということでした。国民の多くが各自の我が儘を捨てて国家に尽くそうという気構えをもち、倫理的に昂揚した時代だったということです。ところが、その時に国家は大きな過ちを犯してしまっていたのです。

敗戦後、それまで白だったものが黒に、黒だったものが白に、というほど価値観が大変動します。人々は他人を蹴落としてでも、物や、新円（戦後発行された新紙幣）を手に入れようと奪い合いをします。人間の赤裸々な性（さが）が露わになった時代でもありました。しかし、そのような時代においても、人は自分の生き方を見つめ直そうという探求心を持ち続け、新しい哲学書が発行された時、それを求めて本屋の前に行列が出来ることもあったそうです。人々は考えました。「自分を空しくして国家や社会に尽くすという戦前の滅私奉公の精神だけではだめだ。国家と

は何か、社会とは何かということ、自分の頭で考えることが出来る人間にならなくては」と。戦後間もない頃、文芸評論家の本多秋五が「エゴを極限までおしすすめエゴを乗り越える」というスローガンを掲げています。それぞれの人により、歩みは様々でも、滅私奉公でもなく、そうかといって利己主義でもなく、それらを超えたものを求めていたのでしょう。つまり個我の確立、それこそが、その時代の知的な人々が求めたものだったと思います。

自分の生き方を探し求める風潮は、人々の生き方に膨らみをもたらしてくれます。時が経過し、生活にゆとりが出て来ると、音楽好きの仲間が集まって音楽会を開いたり、読書会を開いたりするようになります。戦時下に青春時代を送り、読みたい本も読めず、やりたいことも出来なかった人達の欲求が堰を切ったように溢れ出て来たのでしょう。「世界文学全集」、「日本文学全集」などの全集本が各社から刊行され、クラシック音楽のレコードも、経済の高度成長期に入る頃にはSPからLPに進化し、爆発的に売上げを伸ばして行きます。そして、街を歩くと、いたるところからピアノの音が聴こえるようになりました。我が国の急激な経済成長を背景に、各家庭が争ってピアノを買い求めたのです。しかし、物が豊かに手に入る時代になって、「個我の確立」という命題も次第に風化し、色あせてしまった気がします。

ところが、20年ほど前に高度成長期も終わりを告げました。いまは、音楽家をめざす若い方々にとって、自分の音楽活動を続けやすい時代ではないかもしれません。自分が望んでいた活動を続けようとした時、幾多の壁が己の前に立ち塞がることでしょう。そこで、「自分にとって音楽とは何だ。なぜ自分はそれを続けようとしているのだ」などと自問自答することがあるでしょう。その自問自答こそ、真剣に自分探しをしていることの証です。答えを求めて、友達や、先輩に、相談もするでしょう。それでも答えが見つからず、悩み続けたり、そうしているうちに、孤独の深い闇に飲み込まれてしまうことがあるかもしれません。そういう時には、文学作品などに触れると、自分の心を解放し、勇気づけてくれるものに出逢うかもしれません。私は迷ったり悩んだりした時、「人間は努力する限り迷うものだ」というゲーテの言葉を思い起こします。人は心に悩みを抱くことで、他の人の心に対する想像力が育まれ、それが、深く理解し合える友を得ることにつながる可能性もあります。

今の世の中は成果主義が蔓延しています。そういう風潮の中で若い人達はコンクールなどで早く成果を上げたいという焦りを感じているかもしれません。もちろんコンクールに挑戦することにも意義があります。しかし、深く優れた芸術は速成栽培では得られません。悩んで、時には立ち止まって、自分探しを続けてください。

「我々はどこから来たか、我々とは何か、我々はどこへ行くのか」この問いは、その人の職業の如何にかかわらず、人として生きるかぎり、ずっと抱き続ける「問い」と思います。

(なかじま・よういち　：本誌編集長)

Fresh Concert は今年で第12回目を迎えます。第1回～第4回までは座談会を開いて記事にしておりましたが、第5回目からは幾つかの質問項目を用意し、その回答をこの雑誌に掲載するようにしていますが、それも今回で第8回目となります。質問項目のうち1～3は昨年と同じです。4～6は昨年とは異なる質問項目ですが、5、6については、以前にも類似の質問がありました。しかし、4については、最近話題になった音楽界のニュースについて、若い音楽家たちがどのような意見を持っているか興味があったので、質問項目加えてみました。

1. 今回のコンサートへの抱負、演奏する曲に対する思いなどを込めたメッセージをお願いします。
2. 音楽の道に進んだきっかけは？
3. 取り組んでみたい研究テーマ、挑戦してみたい、作曲家、作品は？
4. 一部のマスコミからベートーヴェンの再来ともてはやされた聴覚障害者？の作品が実は、ゴーストライターの手にるものだったというニュースが話題になっていますが、この事件について、あなたはどのように考えますか？
5. 音楽以外に好きなものは？
6. 辛いとき、壁にぶつかった時、あなたはどのように切り抜けますか？
7. その他（書きたいことをなんでも書いて下さい。書かなくともいいです）

(1.) のメッセージは、このコンサートおよび演奏曲についての各自の思いが熱く語られており、出演者の皆さんが最も力を込めて書いておられます。(2.) については、もの心がついたばかりの小さい頃から音楽をやっていたという人か、学校の部活がきっかけになったという人が多いようです。回答を読んで、やはり家庭環境と、学校教育が重要だという気がしました。(3.) の回答は様々ですが、みなさんが高い目標に挑んでいるのが判ります。(4.) はこの事件をよく知っている人と、あまり知らなかった人とで、回答に差があるようですが、ごく若い人が、話題性や特異性ばかり取り上げる今の世の中の歪んだ風潮を指摘するなど、大人顔負けの鋭い批判力を備えていることに驚かされました。(5.) については、スポーツ、他のジャンルの芸術、ペット、食など回答者によって様々ですが、みなさんがリラックスして回答しているようで、読んでいてとても楽しく感じました。(6.) の「辛いとき、壁にぶつかった時の切り抜け方」は様々で、それぞれの回答者の性格と知恵が感じられました。(7.) は、回答した人は少しでしたが 回答した人は(1.) で伝えたりなかったお客様へのメッセージを、ここで改めて心を込めて強く伝えようとしていたようです。

アンケートを通して、とかくさめていると思われがちな若い人たちが、大好きな音楽を通して、熱い情熱を抱きながら真剣に生きようとしている姿が伝わって来ます。出演者の方々の中には、まだ学校生活が続く人少数いますが、その多くは音楽大学を卒業または修了して、これから社会に飛び立つ人たちです。行く先には一層困難で険しい道が待ち構えているかもしれません。しかし、初心を忘れずに頑張り続けてもらいたいと思いますし、我々も可能な限り支援して行きたいと考えております。それでは、出演者のみなさんの回答を、演奏順に紹介させていただきます。

なお、ページ数節約のため、質問事項の重複掲載は避け、回答のみを掲載させてもらいました。出演者の写真につきましてはプログラムのページに掲載しておりますので、そちらを併せてご覧頂きたいと存じます。

音楽現代

2014年4月号 定価 840円

- ♪特集1＝追悼 クラウディオ・アバド
- ♪特集2＝若き日の大作曲家たち その3～その出世作をめぐって [ハイドン、ロッシーニ、チャイコフスキー、ドヴォルザーク、バルトーク…]
- ♪特別記事＝ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭10周年記念 ルネ・マルタンにLFJの過去・現在・未来を訊く
- ♪カラー口絵
 - ・藤原歌劇団「オリィ伯爵」
 - ・東京二期会「ドン・カルロ」
 - ・石川県立音楽堂×東京芸術劇場「こうもり」
 - ・びわ湖ホール「ホフマン物語」
- ♪インタビュー 飯守泰次郎 岡村喬生 三木裕子 横山幸雄 川瀬賢太郎 瀬川祥子+水谷川優子+谷川かつら 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMYビル 3F
芸術現代社 TEL3861-2159

① サクソフォン四重奏：

千葉 一喜 (ソプラノ・サクソ) / 石田 慎 (アルト・サクソ)
岡田 恵実 (テノール・サクソ) / 岩岡 翔子 (バリトン・サクソ)

1. この度は素敵な演奏の場にお誘い下さり、メンバー一同大変嬉しく思います。今回演奏致しますD. マスランカ氏作曲のマウンテンロードは、サクソフォンオリジナル作品というジャンルにおいて、確かに一つの到達点を見せたといえるような、素晴らしい曲です。サクソフォンという楽器が奏でるクラシック音楽をその場で感じていただけたら幸いです。(一同)

2. 家がピアノ教室で、音楽にはよく触れていました。その後、中学入学の時に金ピカに光るサクソフォンという楽器に出会い、いつの間にかそんな楽器と共に過ごし、今に至ります。(石田)

3. 我々はサクソフォンのオリジナル作品の研究を主な目標としております。クラシック界において、未だ不明瞭な位置にあるサクソフォンが、如何に魅力的で

あるか、ということ、まず我々が発見し、またそれを多くの方に知っていただきたいと考えております。(千葉)

4. いろんな仕事の人がいると思いますので、それをみんな頑張ったらいいと思います。(千葉)

5. 絵を描くことも観ることも両方好きです。(岡田)

6. 好きなものを思う存分食べたり、好きな音楽聴いたりします。(岩岡)

② 池田 史花 (声楽：ソプラノ)

1. このようなコンサートで歌える機会をいただきとても嬉しく思います。今日一曲目に「ドン・ジョヴァンニ」よりドンナ アンナの激しいアリア、そして二曲目には対照的な「ロミオとジュリエット」より華やかで明るいアリアを選びました。「私は夢に生きたい」という題名は、今の自分の気持ちに重なります。

2. 音楽を聴くことも歌うことも子供の頃から大好きで、高校は合唱部で有名な高校に進学しました。その部活動を通して、練習により上達する楽しさや、クラシックの魅力も知りました。もっともっと深く学んでみたいと国立音大へ進み、さらには大学院ではフィオルディリージを全幕演じたことですっかりオペラの魅力にはまってしまったのでしょうか？今日に至っています。

3. オペラの役で言うと、「ラ ボエーム」のミミ、「リゴレット」のジルダ、「椿姫」のヴィオレッタなどです。

4. あまり興味がありません。話しが少しそれてしまうかも知れませんが、音楽家はこの世でいちばん素敵な職業ですよ、と昔ある先生がおっしゃいました。わたしはそこにいたいなど、その言葉を聞いた時強く思いました。

5. スポーツが好きです。

6. しょうがないか、と全てをとりあえずただ受け止め、さてこの状況はいつまで続くだろうかと考えます。でもまあ、こんな事で死ぬわけじゃないんだから！はっは！と乗り切ります。

③ 落合 真悟 (チェロ)

1. このような素晴らしいコンサートに出させて頂く機会はなかなかないので、自分の持てる力を十分に発揮してがんばりたいと思っています。僕にとってサン＝サーンスははじめて弾く曲です。特にこの曲は情熱的でサン＝サーンスの世界観をうまく表現できると思うので、みなさんに伝わるように弾きたいです。

2. 僕がチェロを始めたのは5歳のときですが、当時はまだ音楽をやらされているような感じでした。本当に音楽が好きになり、深く勉強したいと思ったのはつい最近です。学校の勉強との両立がとても大変ですが、素晴らしい先生にレッスンして頂いているので、一生懸命がんばっていきたいです。

3. ベートーヴェン チェロソナタ 全曲、バッハ 無伴奏チェロ組曲 全曲
ハイドン チェロコンチェルト

4. 僕はこの事件の問題は、今の世の中の風潮にあると思います。音楽そのものではなく、話題性や特異性ばかり取り上げることは本当の音楽とはかけ離れてしまうと思います。人の評判ばかりを気にせずに自分の価値観を見出していくことが必要であると感じます。

5. 野球、寝ること

6. 自分を信じ、淡々とやるべきことをやる。

④宮城島 康（声楽：バリトン）

1. 本日はお越し頂きありがとうございます。今回選曲した二曲は私が将来演じたい役です。ご来場下さいました皆様、またこれまで支えて下さった多くの皆様に感謝を込めて歌いたいと思います。

2. 小学校で取り組んでいた金管バンドの影響が一番強いと思います。

3. G. Verdi の Rigoletto や G. Puccini の La Boheme など。まだ取り組んだ事のないフランス語のものです。

4. 誠実に生きることが大事であると言うことを感じました。また、人の評価に頼り過ぎてはいけないと思いました。

5. 「食」ですね。小さい頃音楽の道より先に料理人になろうと思ってました。

6. 抱え込まない事が一番だと思います。が、私は人に頼るのが苦手なのでよく抱え込みます(笑)。その時はとても苦しいのですが、中にはきっと人生の真実もあると思います。それが自分に何を教えようとしてるのか、良く見つめる事、俯瞰して反省する事が大事だと思います。

⑤稲垣 有芽乃（ピアノ）

1. この度はこのような演奏の場に立たせていただくことを光栄に思います。

今回演奏させていただく『楽興の時』は6曲から成り、奇数番目の曲は比較的ゆっくりと、偶数番目の曲は対照的にきわめて速く劇的な雰囲気をもった作品となっています。第1番は冒頭から冷たく儂げな旋律から始まり、全体に哀しみを帯びた作品としており、第4番は急速なパッセージと劇的なメロディーからなる、情熱的な作品となっています。ラフマニノフの作品がもつ、どこか儂く切ない雰囲気をいっぱいに表現できたらと思います。

2. 幼い頃、先生がピアノを弾いているのに憧れて習い始めたのがきっかけですが、どンドンと音楽の魅力に引き込まれ今もこのように勉強をさせていただいております。

3. ラフマニノフと同じロシアものですが、全く違う世界観をもつスクリャービンの作品を勉強してみたいです。

4. やはり自分が書いた作品だと偽り世間に発表したということは許されることではないと思います。ですが、たとえゴーストライターが書いたものだとしても、あのように評価された作品自体の価値は変わらないのではないかと思います。

5. 海外ドラマを観るのが好きです。

6. なかなか難しいですが、もやもやとしたままでは前に進めないなので、悩んでいることから少し距離を置き、いったん頭をリセットして、すっきりとした状態でもう一度取り組むようにしています。

⑥ピアノ四重奏 澤辺 明音(ピアノ)／廣瀬 奈津美(ヴァイオリン) 松岡 百合音(ヴィオラ)／石崎 美雨(チェロ)

1. この度はこのような素敵なコンサートに出演させていただくことができ、心から感謝いたします。今回演奏させていただく曲は、私達が高校2年の時にカルテットを組んで初めて取り組んだ曲で、学校の室内楽のコンサートや交流演奏会で演奏した、とても思い出の深い曲です。聴いてくださる皆様に楽しんでいただけるよう、心を込めて精一杯演奏したいと思います。(全員)

2. 小学生の時にピアノを習い始め、憧れの曲を弾けるようになりたいと練習を重ねていくうちに、気付いたら私にとって音楽はなくてはならないものになっていました。(澤辺)／私は小さい頃だったので覚えていないのですが、母によると、母が趣味でヴァイオリンをやっていて、そのヴァイオリンに興味を持っていじっていたので、それで始めてみたそうです。(廣瀬)／ヴァイオリンをやっていたときからいつかヴィオラに変わりたいと思っていて、高校受験の前にヴィオラで受験してみたらと言われて、がんばろうと思いました。(松岡)／チェロが好きだった母から、子供の頃に勧められました。(石崎)

3. バロック・古典ものに取り組みたいです。古楽器の勉強もしてみたいです。(澤辺)／フランクのヴァイオリンソナタをやってみたいです。(廣瀬)／もっと室内楽を勉強していきたいです。ドヴォルザーク、ブラームスをやりたいです。(松岡) フランスものの作品をまだ弾いたことがないので、近いうちに挑戦してみたいです。(石崎)

4. 作曲者にとって自分が作曲した曲は我が子同然のようなものだと思うので、それを他人が作ったものと偽って世の中に出せるということが、私には理解できませんでした。その曲がいい曲だとしても、偽りだというレッテルをはられてしまうことはもったいないことだと思いますし、作曲者にとってもとても悲しいことだと思います。(澤辺)

やはり、一つ一つの曲にはその作曲家の思いや、その曲ができるまでの経緯などが反映されているので、それを偽って発表するのは、その曲にとって、とてももっ

たいないことだと思います。(廣瀬)／人は作品そのものではなくて、耳が聞こえないのに…とかそんな風に評価してしまうんだ、ということがわかった事件だと思います。(松岡)

以前この人の自伝を読んだ時に、この人がすごく苦しみながら作曲をしているということに違和感を感じました。とても大げさすぎる気がしたのです。この事件が明るみになり、私の感じていた違和感は正しかったのだと確信しました。(石崎)

5. ペットの猫と遊ぶことです。(澤辺)／ちょっとしたイラストを描くことです。(廣瀬)／美味しいものめぐりです。(松岡)／食べ歩きをするのが趣味です。(石崎)

6. 友達と遊びに行ったり美味しいものを食べに行ったりして、気分をリフレッシュさせます。(澤辺)／自分の大好きな曲をたくさん聴きます。(廣瀬)

さっさと忘れます。(松岡)／ひたすら美味しいものを食べてがんばります。(石崎)

⑦ 中川 香里(声楽：メゾ・ソプラノ)

1. このコンサートでは私が大好きな曲を二曲を演奏させて頂くことになりました。R. Strauss の歌曲、“Allerseelen “は日本ではよく万霊節と訳されます。こちらでいうお盆のようなものです。大切な人の魂が帰ってくる日のこみ上げてくる温かさや追憶の中での甘い痛みを歌っています。

チャイコフスキーの『オルレアンの少女』は実在した人物であるジャンヌ・ダルクをモデルに描かれたオペラです。ロシアのどこか懐かしく、哀しげな音楽がこのオペラのジャンヌの生き方にとってもマッチしていると思いました。

皆様にもぜひこの素敵な世界を堪能して頂きたいと思っております。

2. 両親がもともと音楽で生きてきた人達だったため、幼少の頃からクラシックは私の耳に馴染みのあるものでした。自然とピアノを弾いたり歌を歌ったりしていたようです。声楽を本格的に勉強し始めたのは高校生の頃でした！

3. R. Strauss の歌曲がとても大好きです。Strauss に限らずドイツ歌曲のレパートリーをどんどん増やしていけたらなあと思っております！

5. 映画はよく観てます。あとは食べることです(笑)

⑧ 山本 有紗(ピアノ)

1. プロコフィエフのソナタ 1 番 Op. 1 はペテルブルク音楽院時代に描かれた作品です。ロマン派の影響を受けており、単一楽章で完結するこのソナタに私はとても魅力を感じました。今回、フレッシュコンサートで演奏できることをとても嬉しく思います。心を込めて演奏致します。皆様に届きますように。

2. 物心ついた頃からピアノを初めていました。ジャンル問わず音楽が大好きで、いつも音楽と一緒に生きてきました。自然と音楽の道に進みたいと思うようになりました。

3. ストラヴィンスキーの作品に取り組みたいと思っています。ソチオリンピックでは開会式やフィギュアスケートで〈火の鳥〉を聴くことができました。オーケストラの響きをピアノで再現してみたいです。
4. 驚きました。曲とは関係ないところで残念に思います。
5. お料理が好きです。お教室では、この間ラズベリーのパンを作りました。その他、鶏とセロリのハニーマスタードサラダが最近のお気に入りです。気分転換になるのでよくお家でも作ります。
6. お気に入りのお店で美味しいものを食べて少しだけ休憩します。そのあとは気持ちを切り替えてピアノに向かいます。
7. 今日はご来場くださりありがとうございました。またステージで皆さまとお会いできますように。

⑨ 宮地 江奈（声楽：ソプラノ）

1. 大学院を修了し、“学生”という立場ではなくなってから初めてのコンサートになります。このコンサートの名にふさわしく、フレッシュな気持ちで演奏したいと思います。曲は、色々な声や表情を楽しんで頂きたく、「マノン」と「アモール」全く雰囲気の違いのあるものを選びました。
2. 中学校時代に音楽関係の部活に入り、歌うことの楽しさに目覚めました。
3. 学部時代から R. Strauss が好きで、今後もっと深く勉強していきたい作曲家の一人です。でもあまり特定せずに、様々な時代、言語、作曲家、ジャンルのものにどんどん触れて、自分の音楽や声の幅を広げていきたいと思っています。
5. 美味しいものを食べること。
6. そのとき目の前にある自分にできることをやります。
ネガティブになったときは信頼できる人に相談することもあります。
7. どちらの曲も違った魅力があります。
最初から最後まで1秒も飽きることなく聴いて頂けるよう心と表情のある演奏をお届けできたらと思っています。

⑩ 三木 佑真（声楽：テノール）

1. 修了して間もなくこのようなコンサートに出演出来ることを大変光栄に思います。大学院で学んだことを生かし精一杯歌わせて頂きます。
今回演奏させて頂く G・プッチーニ作曲オペラ《トスカ》は初めて劇場に聴きに行ったオペラで思い入れが強く、いつか全幕演じてみたいと思っています。今回はその《トスカ》の中から有名な二つのアリアを歌わせて頂きます。
2. 自宅にあったマリオ・デル・モナコの CD を聴き、その声の素晴らしさと表現に感銘を受けたので。

3. 最近二期会の公演で聴き感動しさらに関心が深まったので取り組んでみたい研究テーマは G. ヴェルディ作曲オペラ《ドン・カルロ》とその原作との比較です。挑戦してみたい作曲家、作品も同じく G. ヴェルディ作曲《ドン・カルロ》です。

4. まだ明らかになっていない事実が多々あるように思うので安易な事は言えませんが、曲そのものの価値についてはこの問題とは別に考えるべきなのではないかと思っています。

5. 走ることです。中学高校と陸上部でしたので。

6. 焦って考えても良い解決策は思い付かないのでまず寝ます。翌日からその問題に対し様々なアプローチを行い、少しずつでも前進しいつか解決出来るよう努力していきます。

+*☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆*+★*+☆

過去の Fresh Concert CMDJ の開催記録

第1回	2003年3月19日(水)	: 18:30	新宿角筈区民センターホール
第2回	2004年4月6日(火)	: 18:30	めぐろパーシモンホール(小)
第3回	2005年3月30日(水)	: 18:30	めぐろパーシモンホール(小)
第4回	2006年3月28日(火)	: 18:30	めぐろパーシモンホール(小)
第5回	2007年4月6日(金)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第6回	2008年4月5日(土)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第7回	2009年4月8日(水)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第8回	2010年4月9日(金)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第9回	2011年4月8日(金)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第10回	2012年4月13日(金)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)
第11回	2013年4月5日(金)	: 18:30	すみだトリフォニーホール(小)

※演奏曲目、毎回の出演者など詳細情報をごらんになりたい方は
インターネットの以下のURLにアクセスして下さい。

http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh_concert_top.htm
日本音楽舞踊会議 のキーワードで検索すると以下のURLが表示されます。
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)
ここから上記のページに入れます。

■次ページ掲載の『ロシア滞在記(2)』の著者：恵藤幸子さんは、このコンサートに第5回(2007年)、第8回(2010年)と2回出演し、現在はロシアに留学中です。今回の出演の方々に音楽上の先輩にあたる恵藤幸子さんの瑞々しい感性で書かれた文を、アンケート回答に続いてお読み下さい。

ロシア滞在記（2）

ピアノ 惠藤 幸子

ソチオリンピック

モスクワからソチへの道は遠いが、モスクワ市民も、モスクワ音楽院の学生も、ソチオリンピックが開催された時には、それなりに沸いていた。



空港でのカフェにて。
アイスホッケーにくぎ付けのロシア人たち

私が日本からモスクワに戻ってきた時、ちょうどソチオリンピックの開催期間中で、空港にあるカフェでちょっとした人だかりができていたので、足を止めて人々の視線の先を見た。すると、大画面のテレビにオリンピックのアイスホッケーの様子が映し出されていた。皆、真剣に画面を注視し、どちらかのチームが得点をいれるたびに、わあーっと歓声があげていた。ロシア人は、無表情で冷たく

見られがちであるが、心の中はとても熱いようである。

盛り上がっていたのはこのカフェだけではなく、他のカフェでも同じような光景がみられ、隣の店の店員が自分の仕事をしないで、カフェのテレビにくぎ付けになりながら歓声を送っていた。

ロシア人は、あまり真剣に自分の仕事をやらない方かもしれない。休み時間になれば、どんなに客が長蛇の列を作っても、店員はシャッターを閉めてどこかに消え、スーパーなどでも、閉店間際に行こうものなら、「早くしろ！」と、かなりせかされる。世界の労働時間ランキングで、調査対象になった国の中で最下位であっただけのことにはある。



空港にて発見した矢印マーク。この矢印に沿って行けば、ソチへたどり着ける模様

音楽院の学生のオリンピックの関心度はというと、まず寮生はほとんどの人が部屋にテレビを入れていないので、観ることが出来なかったと思われる。友人達に聞いてみたところ、皆観ていないと言っていた。ただ、寮に住んでいなく、家から通っている人などは、結構観ていたようで、学校で練習室の部屋待ちをしていた時に、オリンピックという単語を何度も耳にした。

フィギュアスケートをやっていた時には、タクシーの運転手に、「日本の女の子のフリーが素晴らしかったよ！君は観たかい？」と聞かれ、ロシア語の先生に至っては、「サチコはムラカミという選手、知ってる？」と聞かれたので、「知っている」と答えたら、「私の生徒に以前、ムラカミっていう子がいたのよ。もしかしたら親戚かも！」と満面の笑みで、かなりの期待をこめて仰っていたので、「先生、日本にはムラカミさんはたくさんいるので、おそらく違うかと思われます……」と答えたら、少しがっかりしていた。

日本ではあまり知られていないかもしれないが、ロシア人は、日本が大好きである。オリンピックの時も、彼らは日本にも注目してくれていたようで、私もなんだか嬉しくなった。

ロシアの冬のしのぎ方

ロシアの冬は寒い。……というより痛い、ロシアで過ごしていて、あまり寒いと感じたことは無く、むしろ日本のほうが中途半端に肌寒いように思われる。はたして、ロシア人たちは、自分の土地の気候をどう感じているのか気になったので、数人に尋ねてみたところ、ほぼ全員がロシアの冬は嫌いと言っていた。ロシア人のアパートに招かれた時、私はその家には一度しか行ったことが無いにも関わらず、「寒いから、うちまで一人で来てもらえるかしら？ちょっと外に出たくないのよ」と言われ、極寒の中、モスクワマップを片手に彼女の家を必死に探した記憶は、今でも新しい。他にも、「今日は雪がひどいか



2013年12月にあったクラスコンサートの直前に入った、雑誌の取材にて。クラスの四分の1のメンバーとともに。右から二人目が筆者。ちなみに男女比はこんな感じです。

ら」「天気が悪くて気分が悪いから」という理由で、急に会う予定がキャンセルになることも今までにたくさんあった。

確かにロシアには、日本にない独特の重たい空気が漂っている。

まだモスクワに来て一年目の冬には、『世界の美しい風景写真集』という本を毎日眺めていないと気が狂いそうになり、学校への通学路にある TASS というテレビ局の大画面に南国の風景が映し出された日には、嬉しくて信号を渡り忘れる位、食い入るように見ていたものであった。

そんなロシアの冬をしのぐのに欠かせないものは、ウォッカである。モスクワの地が零下になると、夜にはウォッカを片手に陽気に笑いあうロシア人をよく見かけたものだった。思うに、彼らはウォッカで身体を温めていたのだ。

人から聞いた話ではあるが、ある生徒が風邪をひいた時にレッスンに行ったところ、先生に、「ウォッカを飲めば治る！」と言われたらしい。音楽院の先生に言われたのである。私は驚いたので、この話をロシア語の先生に話したところ、「その通りだわ！」と、同意されたので、私はびっくりした。

ロシア人男性の平均寿命は今年度、64歳である。近年では、男性のうち25パーセントが、55歳に達するまでに死亡していることが分かっているらしい。ロシア流健康法。見直しが必要なのではないかと強く思った。

私のクラス、ロシアのピアノ

私の先生である、エリソ・ヴィルサラゼ先生は、ロシアを含む旧ソ連圏の国々ではかなり有名なようで、私がキルギスという国へ行って演奏させていただいた時も、「先生はどなた？」と聞かれてヴィルサラゼ先生だと答えたところ、皆、何故か目を丸くして驚いた素振りを見せていた。先生はグルジア人であるが、グルジア近隣諸国の語尾にスタンがつく国々、一例としてウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンなどの人々は特に、先生の名前を知っていた。とても不思議な感覚であった。

先日、学校で練習していた時のこと、私が使っていた部屋に次の時間からその部屋を使う予定の、わりと年を召した先生が入ってきたので、私は練習を



筆者がクラスコンサートで演奏したときの写真。
マールイザール（小ホール）にて。

やめて部屋を出ようとしたところ、いきなり、「先生は誰だい？」と聞かれたので、いつものように、「ヴィルサラーゼ先生です」と答えた。するとその先生、身体をのけぞらせて驚きを表現したあと、「それは素晴らしい、じゃあ君はもう練習する必要なんてないよ！」と、かなり大げさなことを仰ったので、「いえ、練習しないと……！」と答えたら、「そうだね、練習は皆、必要だね。僕も必要だよ」と、自分に言い聞かせるように言っていた。

このように、学校の教授とのちょっとした会話は何度もしているのですが、最初のうちは、ヴィルサラーゼ先生の名前を出しただけでとんでもない反応をされることに慣れなかった私であったが、最近はどうやく慣れてきた。



日本でのヴィルサラーゼ先生リサイタル後。トリフォニーホールにて。中央が筆者、深沢亮子先生（右）も一緒です。

そんな私も、一年目、二年目の時は、クラスに溶け込むことすら出来ずに苦勞していたが、最近では同門の人にも、いろいろと助けて貰っている。以前はレッスンはいつあるかもままならない状況であったが、最近では友達同士で正確に連絡を取りあい、先生本人からも、いつくるという話をしていただけになった。

先生のレッスンは今でもかなり緊張する。下手を

すると本番よりも緊張するかもしれない。先生のレッスンは、言葉で表すなら、「公開処刑」といったところであろうか……？中途半端な状態の曲をレッスンに持っていくと、終始、部屋中に先生の怒声が飛ぶ。

ただし、レッスンの内容は、本当に素晴らしいもので、自分が今まで楽観的に考えていた価値観が、百八十度変化しているように思う。

以前先生は、「私のメソッドを本当に会得するには最低でも五年はかかる」と、仰っていたようで、私はまだまだ三年の身である。

今は、学校の中にあるマールイザール（小ホール）での演奏会に向けて特訓を受けている。

これからも先生のもとで、たくさんのことを吸収していきたいと思っている。

（えとう さちこ ピアニスト 本会 青年会員）

(インタビュアー 戸引小夜子)

2014. 3. 7 日本音楽舞踊会議事務局にて

斉藤：実は私は今から14年前、2000年1月号で音楽の世界の連載「ぽーとれーと(35)」に「～ロシアのピアノニズムに魅せられて～」と言うタイトルで、約2頁書かせて頂きました。その時は自分の活動のきっかけの様な事で終わっていますが、今回はインタビュー形式とのことで、その後の活動の展開や、今後の抱負などをお話しさせて頂きます。



<日本音楽舞踊会議との関わり>

戸引：斉藤さんの日本音楽舞踊会議（以下音舞会）入会は、随分古いのですね。

斉藤：お恥ずかしながらそうですね。きっかけは、音舞会の発起人的存在であった故井上頼豊先生の影響があったからです。井上先生の音楽家・教育者としての真摯な姿勢、世界観の広さに、尊敬の念をもっていました。会の趣旨に共感して、当初は自分なりに意欲は持っていたものの、結婚後すぐに子供が出来たり、地域での音楽活動に追われ、実際音舞会活動はほとんどできない状態。1～2度、日本の曲の公演に参加した位で、退会するつもりでいたところ、私の先輩でもある戸引さんに熱心に引き止められ今に至っています。戸引さんも大変謙虚でいまだに学ぶ姿勢旺盛で、若い人たちを育てることも熱心にやっぴらっしゃるのを見ると、多少の協力はしなければ・・・と今回しぶしぶお引き受けしました。

私の音楽活動の中心は、5つの合唱団や声楽等の伴奏活動、ヤマハなどのピアノ講師で演奏法に迷っている人達にアドバイスしたり、地域の仲間と音楽イベントを企画したりすること。また、エフゲニー・ザラフィアンツのマネージャーとして、各地で啓蒙活動を続けて、はや16年。そんな訳で自分のソロ活動はしばらく御無沙汰でした。

<ピアノとの関わり>

戸引：まず斉藤さんにお聞きしたかったのは、ピアノを始めたきっかけについて、それからクロイツァー先生の事をお話しくたさいますか。

斉藤：クロイツァー豊子先生との御縁で国立音楽大学に入った訳ですが。戦中・戦後に亘り日本のピアノ界、楽壇の恩人とも言えるレオニード・クロイツァー先生(ナ

チスドイツから日本に亡命)の音楽を継承なさった奥様の豊子先生からは、音楽的に素晴らしい指導を沢山受けました。濃厚なロマンチズムに溢れていたレオニード・クロイツァー先生に学ぶ夢も、子供のころ持っていたのですが、早くに亡くなられてしまいました。

豊子先生は身体がお小さいにもかかわらず、豊かな美しい演奏をなさる方で、私の特別小さい手・指のためあれこれ「虎の巻」を教わったことは、いまだに役立っています。

前後しますが、私は京都府舞鶴市出身。当時は軍港舞鶴の繁栄した時代。終戦後しばらくは満州からの引揚者でごった返したそうですが(私はまだ幼児)戦後70年近く経過した現在の舞鶴は寂れる一方。私の実家は約700年続く禅宗のお寺。教育熱心な両親のお陰でピアノを与えられ楽しく習っていたのですが、「本格的な先生に」と5年生の頃から大阪のY先生のお宅まで通うことに(まだ汽車の時代、毎日曜日に往復6時間かけてレッスンに通った思い出。)このY先生のお宅にレオニード・クロイツァー先生が定期的に東京からレッスンに見えていたのです。その後京都芸大付属高校の受験準備をしていたところ受験の2日前にお寺が全焼と言う不慮の大火に遭い、その受験は断念。高校は地元の府立普通科高校にやむなく進みましたが、大火後の大変な中でも両親は私にピアノを続けさせてくれ、大学進学はクロイツァー先生とのご縁で国立音大に収まったというわけです。

大学生活は、世間知らずだった私も一人暮らしの中で、音楽以外の様々なことにも目ざめ、ピアノ一筋の生活ではありませんでした。卒業後即結婚は待ってもらい、1~2年は親孝行でもしようと思家に戻ったことが運のつき、その当時活発だった舞鶴労音に首を突っ込み、クラシックを広める活動にのめり込む時期を迎えました。ピアノの勉強も卒業してからますます熱を入れ始めたように思います。

月に一回は上京してクロイツァー先生のレッスンを受けていたら、「リサイタルをなささい」と言われ、ソロ・ジョイントと何度か開催しました。このころの経験が今も形を変えて続いている訳です。

<けやき平和チャリティコンサートについて>

戸引：このコンサートを始めたきっかけは？

斉藤：1982年頃は西ヨーロッパで反核運動の波が押し寄せ、日本でも芥川也寸志・外山雄三・池辺晋一郎さん達を中心に、心ある多くの音楽家が「反核音楽家達の会」を設立。

この会の事務局のKさんが「原爆音楽」を採集していたS教授と、「原爆音楽」によるコンサートを主催なさっていて、私も伴奏で出演しましたが大変インパクトを感じました。特に感動したのは、被爆者として世に訴える歌手活動をしていらっしやった美輪明宏のステージでした。「府中市でも音楽を通してステージから平和のメッセージを発する会を作ろう」との趣旨を貫き始めて、今年で33回目。一流

のゲストを真ん中に、フィナーレの大合唱。オープニングには、地元府中の様々なジャンルのグループ・民族芸能などが集い、意欲的なコンサートを年に一回開催、今秋第33回を迎えます。合わせて私達が自負出来ることは、毎年のコンサート収益金の中から、被爆者への支援に（3年前からは福島支援も含む）、毎年約40万～50万円の寄付を32年間続けてきたことです。

私はこの「けやき平和コンサートの会」に灯をつけた人間として、副会長・企画・事務局のサポート・フィナーレの大合唱の伴奏に付き合っています。

戸引：ザラフィアンツさんを招聘なさったきっかけは？

斉藤：ザラフィアンツを16年前に初来日させたのも、この会にゲスト出演してもらうためでした。私自身が20年ほど前にロシア奏法に目を開かされ3年ばかり習っていたM先生から間接的に御紹介があり。また評論家の諸石幸生氏からザラフィアンツのスクリアービンの前奏曲集の音源が回りきかされたことで、「今まで聴いたことがないような柔らかく・美しく・幻想的な音」に感じ入り、初招待することに。



エフゲニー・ザラフィアンツと斉藤
寿美代 斉藤宅にて

＜ザラフィアンツの音楽と人と成り＞

戸引：斉藤さんから見てザラフィアンツさんは日本でどう変わって来られたのでしょうか

斉藤：初来日での演奏は大変感動的で、一般の聴衆の胸に響き、涙を誘うような余韻のある音が印象的でしたし、レッスン内容も、目から鱗の落ちるような芸術性の高いもので、私達仲間にとってとても印象深かったため、好奇心旺盛な私は、日本の中で啓蒙してみたい想いにかられたのが運のつきでしたね。あの手この手でザラフィアンツの才能を引き出す面白さも感じながら16年が経過しましたが、本物のピアニストの姿が益々鮮明に。

目を見張るのは、彼の探究心の強さ・好奇心、創造力の逞しさ・完全主義者ザラフィアンツの勉強ぶり。言語学への興味も啞然とするほどマニアック。日本語・中国語の古本あさはり是有名で、何百冊も買い求めては船便で送るほど凝り性。多分彼の家は既に図書館状態に・・・それに飽き足らず、最近では韓国語・タイ語・ベトナム語までひろげ、興味の度合いは際限なくまるで狂気の沙汰。多分彼にとっては、これがストレス解消の一つのようです。実に博学な彼の頭の中から生み出される創

造力は、凡人の私なぞからは計り知れないもの。ザラフィアンツの音楽・音色が「面白い」と言われる由縁はここにあるようです。

一級の才能を持ちながら若い時代の不運から花開くチャンスを失っていた彼は、コンサートの度に音楽が開花していくかのようにでした。最近のステージスタイルは、確実に巨匠の域に入ってきて自信と風格に満ち溢れています。

シャイな面はあるものの、気心知れると大変に雄弁でユニーク。決して暗くはない。私達日本人が学ぶべきことをふんだんに持ち合わせているザラフィアンツの演奏を、是非皆さんお聞きください。



エフゲニー・ザラフィアンツ(1959～)

エフゲニー・ザラフィアンツ ピアノリサイタル

2014年4月20日(日) 午後2時開演 王子ホール 全席自由 6000円

ベートーヴェン：ピアノソナタ第8番、第30番、
ショパン：幻想ポロネーズ、ピアノソナタ第3番

ゴラン・コンチャル&エフゲニー・ザラフィアンツ デュオコンサート

2014年5月10日(土) 午後2時開演 五反田音楽ホール 全席自由 6000円

ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ「春」、サン=サーンス：序奏とロンドカプリチオーソ

以上主催・問い合わせ：アルペジオ音楽企画 03-3418-5344 ミューズ会 042-366-6452

<昨今の事情とこれからの活動>

戸引：いろんな企画をやっていらして感じることは？

斉藤：ザラフィアンツの素晴らしさをもっと広げたいと思ういっぽう、理想と現実の違いを知るほど、最近の音楽界にはがっかりすることが多すぎます。それから音楽学生の学ぶ姿勢も弱い。お金を出して本物を聴くという姿勢も稀有な気がします。私達の時代はクラシック喫茶に通ってリクエストして聴くのが楽しみだったり、来日ピアニストのチケットをアルバイトしてでも手に入れるとかというのが日常でしたが・・・時代が進み過ぎたのでしょうか。

戸引：なんでもたやすく手に入り、簡単に習得出来ることへ関心が向いてしまっているような・・・。

齊藤：音大自体が定員割れになったりで水準も緩くなっている風潮もあるそうですが・・・。

これからの企画としては、今回初めての試みに「ザラフィアンツ&門下生のコンサート」を開きます。趣旨は「プロ・アマを問わず、ザラフィアンツ先生の音楽から学びたい人達が対等に出演しよう」というもの。私は暫くプロデュース活動が主になっていて、ソロから離れていましたが、今回は皆さんと同じ立場に立って参加します。歳と共に音楽の素晴らしさを極めたい気持ちは十分持っているのです。ザラフィアンツの叙情的で深い呼吸や身体の使い方などを盗みながら納得のいく演奏が出来たらと準備をしています。

エフゲニー・ザラフィアンツ&門下生によるピアノコンサート vol.1

2014年4月30日(水)午後5時開演 武蔵野スイングホール(武蔵境駅徒歩2分) 2000円

主催：ミューズ会 連絡先：090-6034-9030(齊藤) E-mail：info@zarafiants.com

戸引：これから齊藤さん自身が音楽以外にやりたいことは？

齊藤：前から願望はありながらできなかった「ヨガ」を本気でやってみる予定です。身体の中の筋肉を鍛え、また正しい呼吸法を会得してみたいのです。ピアノ演奏にとって呼吸は命ですよ。最近教えたり聴いたりする中で、身体と呼吸の一致していない人が意外と多いことに気がつくようになりました。

戸引：音舞会への希望などあれば・・・ピアノの人はあまり積極的に意見をおっしゃらない人も多いのですが、皆さんの意見を取り上げてやっていきたいので。

齊藤：皆さんが其々何をやりたいかによりますでしょうか・・・単に演奏する場所が欲しいのか。みんなで共通の課題を学ぶと言うのは・・・外から見ていると中々難しいのでしょうか？

実力者も多く目標も様々なのでしょうか。

ザラフィアンツから学べることも多々ありますからお気軽にお付き合い下さい。



エフゲニー・ザラフィアンツ
ピアノ・リサイタル

万華鏡のような光を放つ多彩なピアニズム。
魂をゆさぶる孤高の芸術家！

2014
4/20(日)2:00pm
王子ホール 東京都中央区銀座4-7-5
山手線有楽町駅より徒歩7分 地下鉄 銀座駅A12出口より徒歩2分
全席自由 6,000円 (税込)
※5月10日(土)2:00pm 五反田音楽ホールで開催される、
ロシア・ロシア人とピアニスト・コンサートを含むお買い得めの場合、
お得なセット券 (2枚で10,000円)をご利用ください。
取扱い：アルペジオ音楽企画のみ。
詳細は要綱をご覧ください。
主催：アルペジオ音楽企画/ミューズ会 info@zarafiants.com
後援：クオアチア共和国大使館/クオアチア政府観光局
チケットご予約・お問合せ
アルペジオ音楽企画 03-3418-5344
ミューズ会 042-368-0452
小瀬京文化会館チケットサービス 03-5685-0850

ベートルヴェン：ピアノ・ソナタ第8番八短調「悲愴」 作品13
ベートルヴェン：ピアノ・ソナタ第30番長調 作品109
ショパン：幻想ポロネーズ 変イ長調 作品61
ショパン：ピアノ・ソナタ第3番短調 作品58

永遠のベートルヴェンとショパン！
迫真のプログラムでファンを圧倒！

エフゲニー・ザラフィアンツ (ピアノ)
ロシアのノヴォシビルスク生まれ。8歳から才能ある子供たちだけを教育するモスクワ音楽院付属中央音楽学校でエレーナ・ホヴェンに師事。グネーシン音楽院、オースク音楽院、クリンカ音楽院、大学院での首席卒業後、音楽院で教職をとり、全ロシアコンクール、ポゴレリッチ国際音楽コンクールなどで入賞した後ドイツや日本で活発に音楽活動を開始。ソロリサイタルはじめ、室内楽、協奏曲の分野でも高く評価される。聴衆の魂を揺さぶる美しい音色と精神性の高い演奏で熱烈なファンを増やしている。現在母をクオアチアに構え、ザラフィアンツ国立音楽院で教職もつとめている。

※1月17日(金)より先行開始!

Evgeny Zarafiant
Piano Recital

(さいとう すみよ：本会 ピアノ部会員)

日本音楽舞踊会議 邦楽部会発足記念コンサート

作曲、演奏、評論、企画、広範な専門分野を包括する日本音楽舞踊会議に新たに邦楽部会が発足し創立披露演奏会が開かれた。

演奏曲は全八曲。古典曲が四曲、現代曲が四曲、計八曲。一弦琴独奏による「今様」、演奏高橋通。生田琉箏曲「春の曲」、箏本手、高橋澄子、ほか箏替手と尺八。山田流箏曲「都の春」、日向豊都と山木七重。長唄「越後獅子」、三味線が杵屋静子と杵屋勝真代、長唄東音野口賀功。現代曲では、橘川琢編作曲の「沙羅双樹」、琵琶、桜井亜木子、箏、篠塚綾。高橋宏治作曲「Intermezzo」邦楽四重奏団。高橋通作曲「花と月と…春秋」、箏、高橋澄子。高橋雅光作曲「名月に寄せる詩=名月に舞う」、尺八、坂田誠山、箏、木村玲子。

出演者は総勢 21 人、箏、琵琶、尺八、一弦琴、長唄、の多彩な種目をそろえた豪華な顔ぶれであった。

明治以来、洋楽主導で進んできた日本の音楽界も近年はようやく均衡のとれた展望が形成されてきた。古典曲では唄が主導する曲でも、かなり長大な器楽の間奏部、あるいは間奏以上の比重に相当する器楽部分もいずれも高質で緊密な演奏が聞かれた。

これほど広範多様な邦楽の展示公演はまれである。日本が保有してきた音楽文化の中でいまだ十分に顕示されなかった多様で華やいた光景を存分に玩味することができた。これらの音楽を輩出したものは背後にある豊穡な社会であることを音と視覚からも知ることができた一夜であった。西洋の前古典期の宮廷社交音楽もかように形成されたのであろうことが連想されたのであった。

現代作品は、伝統曲の音構成に新しい要素を、どれだけ、いかにして投入するかがそれぞれの作曲家の占める位置により結果が異なる。伝統旋法の世界に生きるか、あるいは、新要素を含めた新しい世界を拡充するか、いずれの方向を意図するにせよ作品としての成果がどれだけ達成されたかにより評価がおのずから形成される。この日も多様な手法の新曲が聞かれたが、いずれも水準以上の作品がそろったことはこの旗揚げ公演にとってまことに祝福すべきことであった。この新たな部会の今後の発展が心底より囑望期待される。

(3月10日すみだトリフォニー小ホール)

助川 敏弥

歌の道・我が音楽人生 (4)



～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

日本合唱協会代表 久住 祐実男

第1部<音楽家を志す迄>Ⅳ

この原稿を書き始めた日は69年前の丁度この日私は忘れもしない東京大空襲の真っ只中に居た。3月10日の大空襲ではない。3月10日は墨田、江東が中心の空襲だった。この惨状は多く語り継がれているが、翌々日の私の居た品川区から大田区にかけて一帯の大空襲についてはあまり語られていない。私が思うのに、墨田江東は日本人の厭戦気分を煽る作戦で無差別の絨毯爆撃は市民を皆殺しにする勢いだった。品川大田区は京浜工業地帯で敵が最も破壊したい地域で、絨毯爆撃のような無駄はしないで、この細長い標的は、B29による焼夷弾も目標地点を示す作戦で、その後の低空での爆弾投下が工業地帯を正確に破壊した。その点わが家は運が悪く焼夷弾の流れ弾が7つも落ちて近所一帯とともに全焼したが、近くの広い戸越公園に逃げた何千人は爆弾の直撃を受けて生き残った人は殆ど居なかった。

私は逃げ足の速かった父が用意してあった弁当だけを持ってまだ火の手も上がっていないわが家を抜け出し、父が願掛けなどをしている神明様に向った。しかし通りにでると既に街は火の海だった。神明様に行くのに貨物線（品鶴線）を渡らなければならなかった。道路の両側は火の海だったが幸い道は塞がってなかったのでそこを駆け抜けた途端後を振り返ると建物が焼け落ちて、道は塞がっていた。ほんの10秒位の差だった。父の逃げ足の速さに助けられた。神社に來てみると、人一人居ない静まり返った別世界だった。ああ助かったと思った。神様のご加護をこの時ほど感じた事はなかった。

しかし、一緒に家を出た兄が、止めるのも聞かず、手ぶらでは後で困ると言うてすぐに家に戻って返した。それではぐれてしまった。前もって落ち合う場所（知人宅）は決めてはあったものの、その日は兄は来なかった。翌朝心配で、まだ炎のある焼け跡の中を、兄を探しに出かけた。戸越公園まで来ると、人の焼けたすごい匂いが鼻をついた。まさに死体累々の中を、死体を踏みつけそうになりながら兄を捜し廻った。ほかに行きそうなところも一日かかって探したが見つからなかった。こうしているうちに3日目の昼頃真っ黒にすすにまみれながらひょっこりと兄が現れた。みんなで歓声を上げた。

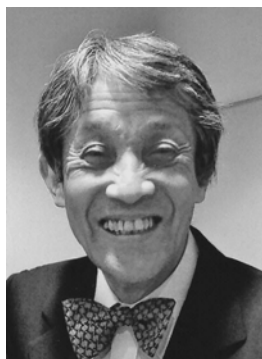
あの時兄は家にとって返すと、ふとんとラジオを持って家を出たとたんに直ぐ肩先にうなりを上げて鉄の塊が落ちて來た。驚いてラジオを取り落としたが、幸

な事に焼夷弾の不発弾で命拾いした。そして我々の後を追ったが間に合わず、公園の方に足を向けたが、あまりにも大勢の人が行くので、かえって危ないと予感して別な方向へ逃げたのが正解だった。こうしてわが家の男どもは無事を喜んだ。母と姉と妹の女家族は葉山に疎開をしていて、我々もそこへ合流した。中学1年の終わり頃だった。この連載の2で書いたとおり、葉山で空襲警報中も布団をかぶってレコードを聞いた思い出が甦ってくる。

働き者の母は直ぐに私を連れてわが家の焼け跡整理に取り掛かり、バラックでもいいので家を建てたかった。近所の大工と相談していたが、「僕が設計を考える」といって口出しをすると大工は、間取りを考えてくれれば助かりますといって任せてくれた。実は私は小さい頃から家の設計図（といっても主として間取図だが）を見るのが大好きで、自分で設計した家の模型をいくつも作っていた。そして初めて本物の家の設計に取り掛かった。

こういうことの好きだった母とも相談しながら、まず最低限の20坪ほどの広さで、直ぐに建て増しが出来るように間取りも考え、大工に見せると、彼は専門家のようですねと褒めてくれた。今は兄が住んでいて70年近く経って、建て替えはしているが、基本の間取りは変わっていない。その後私は自分で物置を建てたり、広い運動場を持った鶏小屋を建てたりした。本当は自分の住む家を建てたかった。私の声楽家の同輩でヘッサート先生の同門でもあった武蔵野の川村英司君は自分で家を建ててしまったのだからすごい。とてもそこまでは出来ないが、とにかく設計や大工仕事が好きだった。

そのような中で、麻布中学に入ると絵の先生が授業中漫談のような面白い話で人気だった。その先生は山田申吾先生で当時日本画家として将来を嘱望されていた若手で、絵の好きだった父は名前を知っていた。ある時私は父に連れられて帝国展覧会（帝展）を見に行くと、そこに山田申吾先生の素晴らしい馬の絵があった。特選の表示がなされていた。早速授業で先生に話すと先生も喜ばれ、話をするうちに、私が建築家になりたいというと、先ずデッサンから始めなさい、勉強は机に向って自分で出来るが、絵の勉強は一人では中々大変だから僕が見てあげようと言われて、私は嬉しくて、お願いしてしまった。放課後の特訓が始まった。父も賛成してくれたので心強かった。



久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963年、仲間20人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

象と蚊とまどさんと

詩人のまどみちおさんが亡くなった。104歳だったという。まどさん、と聞くと誰でもが、あゝ



「ぞうさん」のネ！とにっこりする。私も子どものためのコンサートで、よく歌う。好きな童謡だ。

まどさんに「蚊」という詩がある。大きさは違っても、＜いのち＞という意味では象も蚊も等価なのだ。

さて、その「蚊」。「蚊は死にました」と始まる。そして「自分を 死なせたものの てのひらのうえに・・・」と続く。蚊がやってくれば、私はなんのためらいもなくたたきつぶす。そして、無雑作に手を紙でふく。

まどさんは、どうか。この瞬時まで確かに生きていたその姿を花芯にし、血の花模様となった手のひらの上の＜いのち＞にじっと目を凝らすのだ。

そして「一りんのまっ赤な花を残しておいて・・・」と言葉をつぐ。

更にあるうことか、決然と死にゆく蚊の心中をも代弁するのだ。「— お返しいたします あなたのながれにいたものを たしかに— あなたへと・・・」。

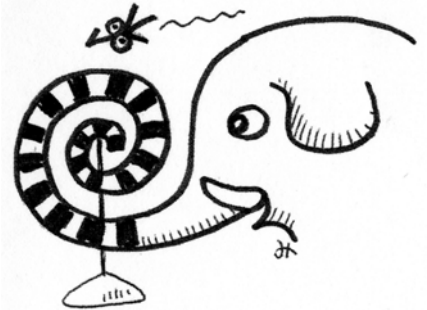
私は、自分の掌（てのひら）をつくづくと見る。今までどれほどの蚊をうち殺してきただろうか。＜蚊のいのち＞の有り様（よう）にあらためて向き合わされる思いになる。

まどさんは、この詩を次のように結ぶ。

「それが 死んでいくものの 生きているものへの 礼儀でもあるかの ように・・・」と。

それを自然界における摂理と受けとめ、そこに自らの死生観を重ねる。生きとし生けるものの＜いのち＞の交換。その深奥をのぞく思いにかられ、私は肅然とする。「蚊」を歌おうと思った。友人の作曲家山崎妥（やすし）が曲をつけた。

コンサートで演奏して、1ヶ月も経っただろうか、知人のYさんから封書が届いた。中に1枚



の葉書があった。Yさんあてのものだ。文面は次のようであった。「私の詩に美しい曲をつけて歌ってくださいまして、ありがとうございます。どうぞよろしくお伝えください。」まどさんからの葉書。ていねいな、あたたかい文字が詩のフレーズのように並んでいる。

コンサートの録音を、私には内緒で、Yさんがまどさんに送ったのだ。それへの答礼の葉書であった。思いもよらぬことである。送付を知れば、私は承知しない。恐れ多くて。

思わぬ展開ではあったが、しかし、私にとってそれは、幸せで感動的なことであった。聞いてもらった感謝を手紙にしなければ、と思った。詩人への、まどさんへの、手紙。肩に力が入る。言葉を選ぶのに逡巡しているうちに、時をのがし

てしまった。今さらながらの後悔である。30年ちかくの前の話だ。

まどさんの訃報を知り、久しぶりである時の葉書を思い出した。さがしたが見つからない。Yさんからプレゼントされて、宝物にしていたのに……。どこにしまいこんだか。

話は「蚊」から「ぞうさん」にもどる。保育園のコンサートで「ぞうさん」を歌い終えたら、「とーさんは？」と子どもから声があがる。こどものぞうは、「かあさんもおなじように鼻が長いし、かあさんのこと大好き」と歌う。残念なことに、歌詞にお父さんは出てこない。お父さんのことも好きだよ、と子どもは思うのだ。

よし、じゃあ次は、とーさんで！と声をあわせる。と、次はおじいさん、おばあさん、お姉さん、お兄さんときりがなくなる。

替え歌が出てくるほどに、子どもたちは「ぞうさん」が大好き。團伊玖磨作曲で誕生し50数年。8小節の歌が親から子へ歌いつがれ愛唱されてきた。

2014年3月15日付の毎日新聞。東海林さだおの4コマ漫画「アサッテ君」。今日の話は「ぞうさん」。台所仕事のお母さんと、女の子が「ぞうさん」を歌ってる。お父さんが割って入り、お父さんが出てこないのは、「片手おち」と異議をとる。「たしかに！」と納得し

た親子3人は、「そうよ父さんも……」と合唱するのだ。めでたしめでたし。今夜はきっと楽しい夕食になるにちがいない。いや明日も、明後日もね。



まどさんには卒園式の定番曲がある。山本直純作曲の「一年生になったら」だ。私も3月のステージでは、子どもたちと一緒に歌う。園児の声が耳を聳るほどにホールに響く。まどさんと直純さんコンビの傑作だ。

直純さんとは、一緒に仕事をさせてもらったことがある。いくつか楽しい思い出がある。酒の席のダジャレには、ずいぶんと笑わせられた。なつかしい。亡くなられてから何年になるだろう。

4月。入学式を終えて、一年生になった子どもたち。「友だち100人」できたかな？まどさんも直純さんも、きっとどこかから見てくれてるよ。

「100人でわらいたい 世界中をふるわせて わっはは わっはは わっはっは」。私も応援している。大人は、君たちの笑顔に責任をもたなくっちゃね。心はずませ1年生。そろそろ桜が咲く。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



【挿絵】武田 光弘(たけだ みつひろ)



名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第48回〕

永遠に終わらない曲

クラシック音楽を敬遠する人にとっては、もしかして理由の一つになっているかもしれない「曲の長さ」。今月はこれについて考えてみよう。

聴く人にとって、時間的にどの位の長さが受け容れやすいか、といったら、これは人により作品によっていろいろだけれど、少なくとも書き手である作曲家たちがこの点について考えている気配はほとんどない。注文により明らかに目的のある「ディヴェルティメント」や「セレナード」（ハイドン、モーツァルトの時代に、貴族が食事どきの背景で演奏させた）、「ゴルトベルク変奏曲」（J.S. バッハがある貴族を眠らせるために書いた）などは別として、自分が書きたいものを自由に書く。時間的な長さは結果としてついてくるだけだ——とまあ、これが多分、本音なのかもしれない。その結果、長い曲・短い曲・中間的な長さの曲、とさまざまな曲が音楽史には残されたわけだが、ではこれらのうち、最も長い曲といったら、どんな曲が挙げられるか。これについていくつか例を挙げてみよう。

長いといえば、まず思い浮かぶのは歌劇と交響曲。大ざっぱに前者の平均は3時間位、後者は30分から40分位だが、歌劇で長いものといえば、ワーグナーの「ニーベルングの指環」が一番だろう。

4つの歌劇から構成される連作歌劇（楽劇ともいう）であり、「ラインの黄金」（約2時間半）、「ワルキューレ」（3時間40分）、「ジークフリート」（3時間50分）、「神々のたそがれ」（5時間20分）を合わせると、合計15時間20分位。一晩では上演できず、4夜にわたって上演されるという途方もない長さを持っているのである。内容は簡単に説明するのが難しいが、要はライン川に眠る黄金（これを持つと、世界を征服できるという）をめぐる、天上の神々、地上の巨人、地下の小人族が争うという話。これにワーグナーが興味を持って取りあげてきた神秘的空想、宿命的な愛、愛の救済、ドイツ人好みの武勇・誠実の思想などを巧みにからませている。

なお、これに次ぐのは、上演に8時間半かかるというガブリエル・フォン・ウェイディッチ（ハンガリー→アメリカ）の「異端者」だが、これはほとんど知られていない。

一方、交響曲の方はどうかというと、ベートーヴェンの第九交響曲「合唱つき」（約72分）やヴォーン・ウイリアムズの交響曲第1番「海」（72分）、マーラーの交響曲第3番、第8番（90分）、ブルックナーの交響曲第7番（75

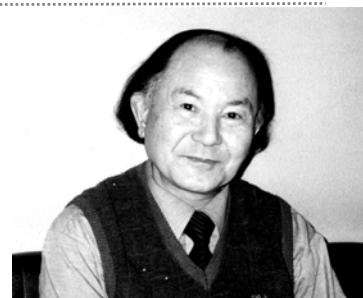
分)、第8番(85分)――あたりが、まあ代表格。しかし知名度に拘らなければ、ハバーガル・ブライアン(1876~1972、イギリス)の交響曲第2番「ゴシック」は105分。リチャード・ロジャース(1902~1979、アメリカ)の交響的映画音楽「海の勝利」も13時間と、マーラーを上廻る作品があることはある。



リチャード・ロジャース

誰でも書くわけではないこれらの作品。長さの点では覚えられるかもしれないが、しかし演奏が大変なので、取りあげられる機会は必然的に少ないだろう。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア(洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト(音楽出版部)、トリオ(現ケンウッド)系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」(東京・池袋)の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」(音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」(講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」(集英社)など多数。



それよりも、よく演奏される曲で長いものはないかという点、じつはあるのである。ワルツ王ヨハン・シュトラウス2世の「常動曲」が、それである。

4分の2拍子によるポルカともいうべきこの曲は、じつは終わりがなく、永遠に続く曲として知られている。かつて山本直純氏(作曲家)が司会をされていた民放テレビ番組「オーケストラがやってきた」のテーマ音楽として使われていたから覚えている人も多いと思われるけれど、どこが永遠かという点、3分ほどで達する終わりがダ・カーポ(始めに戻れ)となっているからである。何回やっても終わりにくると「始めに戻れ」と繰り返すようになっている曲。すなわち終わりがなく、永遠に続くというわけである。まともにやるなら、演奏者が死ぬまで、となるだろう。実際の演奏では、一回か二回繰り返したところで、指揮者が「これで終るぞ」と合図して終るようになっている。

似た曲には、エリック・サティのピアノ曲「ヴェクサシオン」(いらだち、嫌がらせの意)もある。一つのフレーズを、非常にゆっくりと840回繰り返せ、との指示があり、その通りに演奏すると、15~18時間かかる。終わりがあるものの、かなり長い。

【連載】

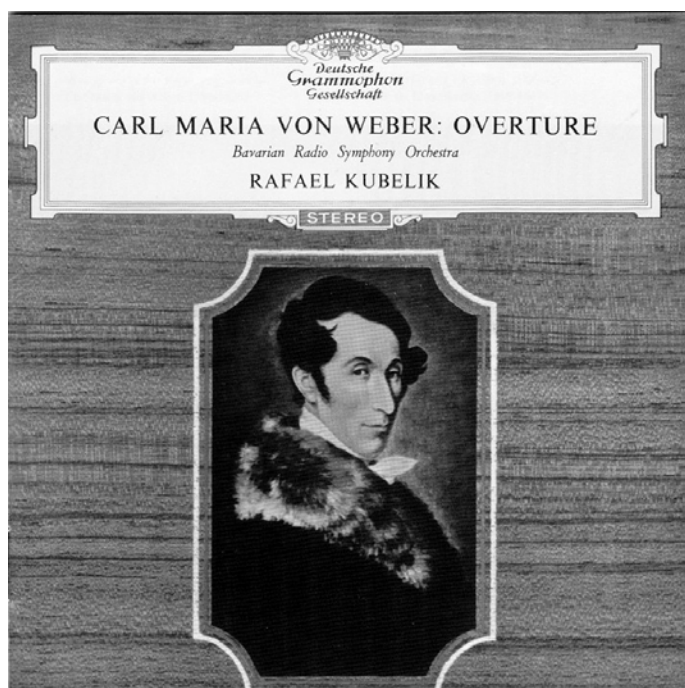
音盤奇譚

板倉 重雄

第 53 回

ウェーバーの歌劇《アブ・ハッサン》序曲

今年チェコ出身の名指揮者、ラファエル・クーベリック（1914～96）の生誕 100 年を記念して、彼の録音が続々と CD 化されている。その中で、個人的に最も懐かしいのがウェーバー序曲集。それも《オベロン》や《魔弾の射手》などの有名序曲ではなく僅か 3 分半ほどの《アブ・ハッサン》序曲である。この曲は、クラシックを聴き始めた 10 歳の頃、FM 放送からカセット・テープに録音して何度も聴いた思い出の曲なのだ。しかし結局 LP は買わず終いで、CD 時代になっても今まで一度も聴いていなかったもので、約 40 年ぶりの再会となった。いや、正確には子供の頃に飽くことなく繰り返し聴いたことをすっかり忘れていて、CD を何気なく聴いていて、トラック 2 のこの曲にさしかかって、たちまち全てを思い出したのだ。バクダットを舞台としたオペラなので、曲調は隣国トル



コを舞台としたモーツァルトの《後宮からの誘拐》序曲に良く似ている。その曲が、まるで昔通った小学校までの道のりを再び歩くかのように蘇る。「このあと打楽器が華々しく入るぞ、ここでオーボエのおどけた主題が出るぞ、この弦のささやきにはフルートが応じるぞ、ここでティンパニがドンと入るぞ・・・」こうした記憶の通り曲が進むので、すっかり嬉しくなってしまう。記憶の蘇り方とは不思議なものである。

この CD には筆者の個人的な思い出以外にも、音楽愛好家への素晴らしい贈り物が入っている。今まで入手しにくかった、クーベリックによるメンデルスゾーン《真夏の夜の夢》序曲のリハーサル風景が 32 分半も聴けることだ。クーベリックは快活な声で、あるときは旋律を口ずさみ、あるときは和声を論理的に説明し、あるときはダイナミクに注意を与え、あるときは音楽的気分を言葉で形容しながら、音楽を自分のイメージ通りに仕上げてゆく。こうした指示によって、音楽がみるみる表情豊かとなってゆくさまはまさに聴き物。個人的感傷抜きで、お薦めしたい一枚である。

- ウェーバー：歌劇《オベロン》序曲、歌劇《アブ・ハッサン》序曲、歌劇《魔弾の射手》序曲、歌劇《オイリアンテ》序曲、劇音楽《プレチオーザ》序曲、祝典序曲《歓呼》
- メンデルスゾーン：《真夏の夜の夢》序曲リハーサル風景

クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団

[タワーレコード PROC-1388] (CD) (写真 前ページ)

1964年ステレオ録音。1961～79年まで首席指揮者を務めたバイエルン放送交響楽団と



の初期の録音。録音当時 50 歳だったクーベリックの瑞々しく直截な指揮ぶりが、これら初期ロマン派作品に相応しい。リハーサル風景の日本語訳が 7 ページに渡って掲載されている。

- メンデルスゾーン：《真夏の夜の夢》リハーサル風景 (写真 左)

[グラモフォン MI3024] (LP、廃盤)
1970 年頃に出たリハーサル風景の LP レコード。市販品ではなく、グラモフォンのレコードを何枚か買った人向けの特典レコードだった。

【板倉重雄氏プロフィール】 1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



『音楽の世界』3月号の訂正箇所

- ◆表紙 目次表示 4行目 [誤] [正]
海外リポート フランスのコンクールを受けて 湯川 子他 → 湯川 亜也子他
- ◆本文 P17 11行目
陰旋法（都節）などが頭に浮かんできます。来ます → (来ます) を省く
- ◆本文 P18 下から9行目 流動体が個体になる。 → 固体

銀座オペラ Vol.2 ドニゼッティ“愛の妙薬”ハイライト

—エレクトーンソロ伴奏によるチャレンジ—

研究：阿方 俊

「浅草オペラ」といえば、大正時代に藤原義江、田谷力三、原信子などの歌手を輩出し、日本のオペラの大衆化に大きな役割を果たしたことで知られている。それから100年近く経った今、「銀座オペラ」というオペラシリーズが現れた。

「銀座オペラ」と聞いても首をかしげる人が多いと思われるが、筆者もはじめて「銀座オペラ」Vol.2 ドニゼッティの“愛の妙薬”ハイライトを観る機会を得た。2月28日、ヤマハホール。

出演者は藤原歌劇団の歌手と演出の喜田健司（昭和音楽大学大学院講師）。制作を公益財団法人日本オペラ振興会が担当した。舞台は写真のように最小限の小道具と照明で衣装付きで演じられた。



写真は左から、ジャンネッタ（関真理子）、アディーナ（光岡暁恵）、ネモリーノ（中井亮一）、ドゥルカマーラ（三浦克次）、ベルコーレ（森口賢二）、西岡奈津子（エレクトーン） 写真（Ayumi Kakamu）

プログラムによると「銀座オペラ」の特長として次の4つが挙げられている。

1. その目的として、有名なオペラの「ハイライト」を中心に上演。はじめてオペラを観る人にも親しめ、またオペラ通の人にはオペラの聴きどころを堪能してもらうこと
2. 演奏者は、国内外のトップクラスの実力派が出演。今回は、光岡暁恵（第5回静岡国際オペラコンクール第1位／日本人初）や三浦克次（藤原歌劇団、新国立劇場を中心に活躍）ほか藤原歌劇団団員が出演
3. 伴奏は、オーケストラでなくエレクトーンを使用。今回は、西岡奈津子（平成音楽大学講師）がソロで担当

4. アイデンティティとして“銀座だからこそ”“ヤマハホールだからこそ”何ができるのか。
銀座は、明治時代から今日まで情報の発信基地として存在してきている。「銀座オペラ」を通して新しい音楽文化の発信に期待

とはいっても、電子楽器についてはネガティブな声が聞かれることも多い。ここでエレクトーンの可能性について、日欧を代表する識者の声を紹介したい。

1992年5月19日、日伊音楽文化交流「音楽の虹フェスティバル」でハイブリッド



写真左はエレクトーンを取り囲み打ち合せ中の、左から光岡暁恵、中井亮一、三浦克次、森口賢二、関真理子。写真手前：西岡奈津子（エレクトーン）
使用楽譜は、ボーカルスコアにオーケストラスコアから使用されている楽器の音色や省略されている部分や打楽器を加えたものが用いられている。

オーケストラによる「修道女アンジェリーカ」が大阪国際交流センター大ホールで上演された。出演はヴェルディ音楽院と関西歌劇団、エンリケ・マッツォーラの指揮。これに立ち会ったヴェルディ音楽院のマルチェロ・アッバード院長（当時）は「最初の音が出た時にはハイブリッドオーケストラに通常のオーケストラとは違う響きを感じたが、幕が上がって照明が当たり、歌声が入ると何も気にならなかった。イタリア人は世界でもっともオペラに保守的であると自負している

国民であるが、この響きであればイタリア人も納得するであろう」と発言している。

また、音楽評論家で水戸芸術館の館長でもあった吉田秀和氏が、エレクトーン2台とフルート、ティンパニーで上演された「魔笛」について、朝日新聞の音楽展望「参加するオペラへ」（1993年8月23日）で次のような主旨の感想を述べている。

「この劇場は400人そこそこの演劇用の小劇場であり、管弦楽団を入れる場所はない。ピアノで代用と考えていたところ、臼井英男氏の強力なすすめでエレクトーンを使うことにした。それがよかった。私は従来この楽器音色に違和感をもっていたが、最近の機種は違っていた。それに水戸にはすごく上手で音楽性の豊かな小林由佳さんという演奏家がいた。もし私が賞を出すとしたらこの方にさし上げたいと思ったくらいである」

当日の聴衆の中にも、吉田秀和氏と同じようにエレクトーンに対する違和感が取れ、西岡奈津子さんの演奏にこの楽器の可能性を感じた人がいたのではなかろうか。

（あがた・しゅん：本会研究会員）



人・アート・思考塾(2)

作曲 小西徹郎

前回から何故岡山市を取り上げているのか？仕事で関わっているからというのは当然であるが、一番の魅力は官民一体で芸術を中心として事業を展開していることにある。民間のエンターテインメント事業だと見向きもしない芸術分野、多くの芸術家は発表の場に苦しみ、発表するために自ら資金を調達し自らマネジメントをしなければならない。要は、まったく後盾もなく活動をしているのが常であろう。高額な出品枠を買い、少しの時間、少しのスペースを使い作品を出していく。それは仕事というよりは自己鍛錬の場であるだろう。

ところが、公益財団法人 岡山市スポーツ・文化振興財団(以下財団と表記)では、「岡山市ジュニアオーケストラ」「チルドレン・ミート・アート・プログラム」「ダンス・インキュベーション・フィールド岡山」など、音楽や舞踊に限らず、教育プログラムも持ちながら文化を育てている。そして各プログラムが存在していることが芸術家の活動にとって非常に重要な意味を持つ。その意味については追々書くものとする。



ダンスインキュベーションフィールド岡山第一回公演『黎明』より

いくつかの事業の中で特に「ダンス・インキュベーション・フィールド岡山」においては東京や大阪から優秀な指導者を招聘し、教育されたカンパニーメンバーは舞台公演もこなす、立派な市立のダンスカンパニーである。つまり、特筆すべきは財団がダンスカンパニーを作った、ということ、そして実力も人間性

も豊かな講師を迎えダンスを通じて豊かな教育を行っていること、その豊かさとは発表の機会はもちろんだが考えられたプログラム、そしてダンスでも様々な分野のダンサーが講師を務めるためカンパニーメンバーは多くの分野のダンスを学ぶことができる、ということだ。芸術監督に高谷大一氏(高谷バレエスタジオ代表)を迎え、厳選された講師陣による身体表現に必要な基礎を原点から学び、ケガから自分自身を守るためのマスターストレッチ(セルフコントロール)からバレエ、コンテ

ンポラリーダーダンス、マイム、リズムトレーニングなど、身体づくりや身体能力（技術）の質を高めるプロジェクトとしての創作活動を実施している。

そして、昭和40年に結成された「岡山市ジュニアオーケストラ」は小六禮次郎氏やトランペット奏者の数原晋氏など非常に著名な音楽家も輩出している。また良き指導者のもと、海外遠征や海外から招き入れたりなど、活発な活動をしている。

このように財団が教育と文化のためにオーケストラを運営し市民に貢献していることはとても喜ばしいことである。音楽の環境作り、豊かなバックアップ体制のもと子供たちの感性は豊かになるであろうし保護者も一緒になって応援していけることはまさに市民文化の向上と言えるだろう。

また、「チルドレン・ミート・アート・プログラム」は子どもたちの文化芸術への興味や感動を引き起こし、子ども誰もが持っている感性、可能性、想像力、表現力、コミュニケーション能力等を育むとともに、文化芸術に触れる機会を促進している。体験型のワークショップや身体を伴った表現を通じたプログラムがあり、ここでも東京から講師が岡山に入りとてもレベルの高いプログラムが実施されている。

この事業について私はとても興味深いものがある。何故なら、以前専門学校にて講師をしていたが若者たちの人間性の根幹部分において多くの疑問を感じ、様々なプログラムを作って実践してきたがたどり着いた答えは、「幼少期における体験や教育がほぼ全てを決めてしまう」ということであった。以前埼玉県「Studio BAM」(山崎慎一郎・方波見知子主宰)で行ったワークショップ「伝え合う喜び 自分を楽しく表現してみよう」では自身のプログラム「表現と言葉」を用いた。ここで感じた大切なことは子供たちの豊かな感受性を伸ばすこと。そのことが岡山では実施されている。こういう恵まれた環境を財団が行っている。

しかも身内で内容を固めることなく、外からの意見をふんだんに取り入れ、県外から、大阪や東京からも優秀な人材を呼び、クオリティの高い内容のものが展開されている。外に向けて発信していくために外の風を取り込んでいることがわかるだろう。外に向けて発信し、認知度を高めていくためのやり方と、内輪が内部がよくなっていくためのやり方では180度手法が異なる。

外に向けて発信し、認知度を高めていくためには外の風をふんだんに入れなければならないだろう。内部がよくなっていくためには外の風を入れてはならないだろう。内部がよくなっていくとどんどん閉鎖的になってクオリティが下がるだろうし最終的には消滅してしまうだろう。だが外に向けて発信し、認知度を高めていくと良き発展をしていくだろう。何故私が分野の壁をまたいで、また地域の壁をまたいで物事を進めていくのか？その理由は上記の考えから来ており、明確だ。

(こにし・てつろう 本会理事)

タイトルロゴ：前川久美子（日本出版美術家連盟 賛助会員）

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橋川 琢

第十回 追悼・今井重幸

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

第十回目は、作曲家「今井重幸」として、現代舞台芸術の企画演出者「まんじ敏幸」として、長く舞台・舞踊・演劇界に関わってこられ、拙稿でも対談しました故・今井重幸氏への追悼です。

■今井 重幸/まんじ敏幸

(作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者)

1933年生まれ。1945年より独学で作曲を初め、交響詩「狂人の幻影」が縁となり、伊福部昭に入門。のち米国でエドガー・ヴァレーズに師事。1953年NHKテレビの開局にともない、影絵・人形劇の制作スタッフとして参加し、「蜘蛛の糸」「杜子春」「走れメロス」などの教養番組音楽を作曲。映画では前田憲二監督、亀井文夫監督、手塚陽監督らの音楽を担当。舞台では東京芸術座、ソシエテ・デザール、青俳、文学座、人間座、薔薇座、アルス・ノーヴァなどの劇団に劇音楽を作曲。

また、まんじ敏幸の名で舞台演出家としても活動し、1956年、舞台に関連する若い芸術家たちとともに「現代舞台芸術協会」を設立、企画と演出を担当。

ヨネヤマ・ママコ(ダンス・マイム)、土方翼(舞踏——今井は土方の芸名の命名者であり、「舞踏」のジャンル名も今井による)、三条万里子(モダンダンス)、小松原庸子(スペイン舞踊)、長嶺ヤス子(フラメンコ舞踊)らを世に送り出す。

現代舞台芸術協会理事長、日本フラメンコ協会理事、東京造形大学造形学部・舞台芸術専攻元講師、日本大学生産工学部・建築工学科元講師。2014年1月、81歳で死去。



(写真：小島竜生)

■橋川 琢(作曲家・日本音楽舞踊会理事)

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。



■今井重幸氏との15年

本誌拙稿「明日の歌を～楽友邂逅点」で、対談(2012年1月～2012年11月の、不定期掲載6回)をさせていただいた今井重幸先生が逝去されてから2ヶ月が経つ。

今井先生とお会いしてから約15年。2014年2月号での拙稿追悼文の最後に、「これからの、今井氏のいないコンサートはどれだけ淋しくなることだろうか。」と書いたが、やはり今、淋しい思いがある。演奏会でお会いする度「あなたも聴きに来たんだね。熱心だね。」と握手をしながら話かけてくださる時の笑顔と穏やかな口調、お洒落で紳士的な立ち振る舞い。ご逝去後、演奏会に行く度、今井先生を知る者同士で「今井先生ならこのコンサート、喜んで臨席していたに違いない」と何度も語り、偲び合った。

思えば、対談はちょうど折り返し地点であった。病気の快癒後、残り半分のお話を伺い、掲載する予定であった。三条万里子（モダンダンス）、小松原庸子（スペイン舞踊）、長嶺ヤス子（フラメンコ舞踊）の各氏を育てた話。伊福部昭門下として、同門の芥川也寸志、黛敏郎、松村禎三、三木稔、石井真木、そして池野成の各氏他との交流。30年勤め、東京造形大学で教鞭をとった経験談。人生を回顧し、これからの展望を示した回顧展「春の祭典」の盛況と熱狂……。インタビューは叶わぬままとなってしまった。

連載の始まる前、大まかなプロットと、副題を一緒に決めた。「舞踊に魅せられた作曲家が育てた、異色の舞踊家列伝」という副題を大変気に入って下さっていた。音楽という美を手し、多くの舞踊家、芸術家を育て上げた。音楽家が多くの界面を持つことを、自身の生き様が証明していた。私自身、どれだけ大きな影響を受けたことか。

■ 今井重幸編・最終章：「縁（えにし）」

今井先生とは至る所で酒席をご一緒させていただいたが、個人的にも一対一で一緒に飲む機会が何度もあった。最後に、ある日お聞きした忘れられない話をここに記したい。尚、この話は今井重幸編（第六回）の最終回、最終章として掲載することを、生前の今井氏と約束していたものである。今、その約束を守り発表するとともに、改めて心からご冥福をお祈りしたい。

——それにしましても、私も今井先生とはこうしていろいろな所でお酒をご一緒させていただきました。お顔の広い先生のこと、これまで様々な方と酒席を共にされたかと思いますが、特に忘れられない方はいらっしゃいますか？

「私はお酒が大好きで。戦後のどさくさにまぎれて若い頃から飲んでいました。15歳（！）の時、阿佐ヶ谷駅の北、酒場が密集したハーモニカ横丁で、ある作家と飲みました。それは太宰治さんです。1948年、彼が自殺する半年ほど前だったように思います。

すでに太宰さんに心酔していた私は、嬉しいやら緊張するやら。話しかけて、太宰さんの文学についての話をしていたのですが、その内太宰さんが『お前のような若造に、俺の芸術が分かるか！』と言いはじめ、喧嘩、芸術論争になりました。その時、太宰さんと一緒に来ていた井伏鱒二さんが『せっかくの若いファンに何て事を言うんだ』と仲裁に入って、さらにその日は井伏さんが二人分奢って下さいました。」

——太宰治さんと飲んだだけでなく喧嘩（！）して、その仲裁に入ったのが井伏鱒二さんだったのですか！何とも面白いお話で……。ちなみにその店については覚えていらっしゃいますか？

「ええ、今でもよく覚えています。『縁（えにし）』という名の店でした。思えば、僕ののちの人生は、音楽、舞踊、舞台などを通じて多くの芸術や人と様々な縁で結ばれてきました。今日まで本当に、たくさんのご縁をいただきました。それはとても有難いことだったと、今、心から思います。」

《明日の歌を》-楽友邂逅点-（第六回 / 第十回）今井重幸編（完）

W. ヴェンダース監督がファッション・デザイナー山本耀司氏の仕事ぶりやインタビューを、パリと東京という二都市の風景と共に撮った「都市とモードのビデオノート」というドキュメンタリー・フィルムがあります。その中で「新たなアイデアはショーまでは極秘？」という監督の質問に「アイデアなんて何でも見せられるしそこに秘密はない。でもイッセイ・ミヤケのアイデアを盗んだとしても、その裁断は出来ない。各々のアトリエには優れた技術の裏付けがあり、独自の言語を持っている。」と山本氏が答える場面があり、作曲家も画家も建築家も芸術家である以前に職人だと常々思っている私としては「我が意を得たり」と感じたのでした。このやり取り、巷で話題の作曲代筆問題にもどこか相通ずるところがある気がします。

クリエイターの個性や力量が真に発揮される場所はアイデア——例えば言葉や図表による構想や形式の明示——ではなくて、それをレアリゼーションする際の細かな作業や判断においてです。どんな卓抜な(もしくはありふれた)アイデアからも、作家の感性や技術力次第で名作も駄作も生まれ得ます。また芸術作品の創造における「技術」というものは、はじめは臃げなイメージとして夢想されるに過ぎなかったものに、然るべき姿形や構造を与えることによって唯一無二の存在である「作品」へと仕上げていく過程において、作家自身が必要とし、故に常に探求を重ねざるを得ない思考過程や手段、感覚などのことです。特定の時代の芸術においてその役目を果たし終えた後に、確立された技術体系として整理整頓され、ついでに小骨も親切に抜かれた上で、〇〇学概論や△△課題集としてクラス授業で学ばれていくような類のものとは異なるのです。かつて存在しなかった世界が芸術家の鋭敏な目や耳、心によって捉えられ、それを的確に表現する術として、新たな技術や語法が時代を反映した語彙や文法のもとに育まれていくというのが筋であって、歴史上に既に存在した作品からあれやこれやを拝借して来て上手に繋ぎ合わせたとしても、それは確かに一つの楽曲や絵画ではあるかもしれませんが、(「引用」自体を創造的行為に昇華させていない限り) その時代に真に存在する意義をもった芸術作品とはなり得ないことでしょう。

芸術の創作に携わる者は、他の誰にも真似の出来ない自分自身に固有の職人技やアプローチによって作品を作り上げていくべきなのです。こうした観点からみると、アイデアさえ提示出来れば技術的な作業は他者に丸投げしても“芸術作品”を生み出せると(素人ならではの)誤解をしてしまった佐村河内さんも、アイデアも作曲技術も借りてきたものを用いて“人様の”楽曲を(玄人ならではの筆致で)書いてしまった新垣さんも、(法には全く触れずとも)芸術創造行為の規範にはやはり抵触するところがあったのではないかと私個人は考えています。そのように生み出された楽曲が解り易いストーリー込みで流布し、周囲の商魂にも結びついてとめられなくなるという物悲しくも滑稽な成り行きを知るにつけ、複雑な思いを抱かざるを得ません。

何故ならそのような音楽がクラシックCDとしては一番売れてしまうという奇妙な国と時代に、彼ら二人も我々も、音楽家として共に生きているのですから…。

(なつだ まさかず・作曲家)



投稿

いま時の公共放送に思うこと

作曲：金藤 豊

終戦後まもなく、私は広島県の尾道にほど近い、菅野という村に住んでいて、府中市の郵便局へ電報係として勤めていた。この頃には大陸に渡った家族や兵士が戻って来たりしたが、生活は今どう食べていかれるかも分からない状態で、将来のことに不安を抱えながら余裕もない暮らしをしていた。

そういう時にラジオから流れてきた「リンゴの歌」（万城目正作曲・サトウハチロー作詞）は、荒んだ心にひと時の安息と、戦争も終わりこれから新しく生きるんだという元気をもらったことを昨日のように覚えている。

その頃、何という番組かは忘れたが、一日中クラシック（オーケストラ曲等）の番組を放送していたことがあった。欧米との戦禍が終わったことを実感した直後のことであるので、新鮮な気持ちで聞き流すように聞いていたが、（聞いた端から忘れていくこともあったが、）何か漠然と音楽という芸術が、体の中に浸み込むような感動も覚えた。

こういう原初体験を持つ者にとって、現在の公共放送並びに民間放送も含めて、テレビ等ではクラシック（現代の日本の音楽や日本の伝統音楽等も含めて）音楽の番組が少なすぎるように実感する。

現在地方の各ホールでもクラシック等の音楽会は日常的に行われている。地方の放送局や公共放送は、これらをピックアップしてテレビ等でも番組作りをし、音楽文化情報を提供するの使命ではないかと思う。

今はテレビ文化が発達しているので、これらが中心となって放送しないと、クラシック音楽・音楽芸術での感動が人々に浸透していく機会が少ない。

特に地方在住の高齢者等は、歌謡曲ばかりしか聞いたり観たりする機会がなく、知り合いなどでも「私たちはクラシック等のそういう音楽は解らないし、曲を聴きに行く人もいません」という人達ばかりで、優れた芸術の感動を覚える事もないのは実に寂しいことである。

そういう状況であるから、私たちが次の発表会のための作品づくりをして、チラシやチケットを持って、知り合いの民生委員のところへ行って、そして「どなたか聞きに来てもらえないでしょうか」といっても、「歌謡曲ならともかく、こういう曲を聴きに行く人はいませんね」と断られるのが実情である。

公共放送は、全国放送という特権を生かして、もう少しテレビ等を通じてクラシック音楽や現代の日本の音楽・伝統音楽等の芸術音楽の番組作りを増やしてもよいのではないか。

(かねとう ゆたか：本会 作曲部会員)

Tさんの先月号の投稿『贗作事件について』の文において、科学の世界においては、殆どが共同研究なのだから、音楽芸術の世界（特に作曲）においても、共同作業が今後増えて行くのではないか、という指摘がありました。

しかし、科学と芸術とでは目的が違います。科学の目的は真理の探究とその証明です。そのためには、分野の異なる研究者の相互協力が不可欠な場合が多々あります。例えばゲノム（遺伝子情報）の発見、解析は、生物学、物理学など異なる領域の研究者の協力によって成し遂げられたものです。科学で最も大切なことは、その理論（或いは仮説）の正否です。芸術における評価の基準は、正しいか、間違えかということではなく、好きか、嫌いか、感動するか、否かといったもので、それは個々の受容者の主観によって大きく異なります。

音楽芸術も、昔からその多くは共同作業によってもたらされて来たものです。例えば作曲者と演奏者が書いた楽譜を音にする演奏者との共同作業、これは作曲者が物故した後もずっと続きます。しかし、ありそうであまりない共同作業形態もあります。それは、複数楽章で構成された一つの作品を、異なった演奏者が、各楽章毎に分担して演奏するような共同作業です。ベートーヴェンのソナタの第一楽章をAさん、第二楽章をBさん、第三楽章をCさんが演奏するようなケースは、試演会、勉強会などではみられても、通常のコンサートでは殆どありません。なぜでしょうか？音楽は、「これぞ正しいベートーヴェンの解釈」というように、答えが一つしかないというものではありません。それぞれの演奏家が「ベートーヴェンはこうあるべき」という主張を持ち、自分自身の心に描いたベートーヴェンを全曲通して演奏したいという拘りを強く持つからでしょう。

共同作業の場合、複数の人間の協力によって達成された成果が、整合性をもち、一体化されていることが求められます。多くの人々を喜ばせ、落胆させた万能細胞「STAP細胞」の研究結果発表の大きな問題点は、多くの共同研究者のうち、研究全体をチェックする人がいなかったか、出来なかったことではないでしょうか。

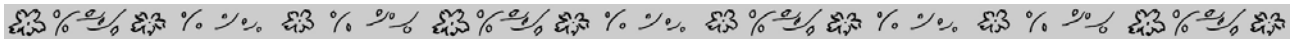
音楽芸術のジャンルでもオペラなどは、作曲家、指揮者、歌手、演出家など、多くの人々の共同作業によって達成されます。音楽を作る作曲家、それを音にする指揮者、舞台を作る演出家にはそれぞれ分担した役割がありますが、三者ともそれぞれ作品の全体像を心に描き、「この部分は間延びするからカットして欲しい、この部分は音楽が短すぎ舞台転換が出来ないので音楽を挿入して欲しい」などと作曲者に要請したりして、意見対立することがしばしばあります。それでも異なる個性が熱い情熱をぶつけ合うことにより、お互いが触発され、より実りある成果が得られることも多いのです。それが、芸術分野における共同作業の面白さでしょう。

学問研究の分野では、自然科学のみならず歴史などの人文科学、またその他でも、より広い領域に渡る共同研究が有効かもしれません。お互いに自分の専門と異なる角度から物事をみつめ直すことで、新しい発見が得られるかもしれないからです。

芸術の分野においても、音楽、舞踊、美術など他領域の芸術とコラボレーションすることで、芸術の新しい可能性が開けるかもしれません。

しかし、Tさんが示唆する一つの音楽作品を複数の作曲家の共同作業で創り出す方法は、これからもそう盛んにはならないと思います。それは1つの楽曲を複数の演奏家が分担して演奏するという共同作業があまり行われないうのと類似した理由によります。このことは、年齢、経験の大小に拘わらず、音楽創造について、より深く考えている人たちに対してなら、更なる説明は不要と考えます。

(夢音見太郎)



絶対音感を巡って（ロクリアン正岡氏 VS 編集長）

ロクリアン正岡氏の投稿文

日野啓太郎氏の文章読ませていたが、氏により「嘘」の明快な根拠とされている絶対音感と相対音感云々（文章の初めの方）のところに、少なくとも私と大きな音楽認識上（理解上といったほうがよいが）の違いがあるので、この件に関する私の考えを率直の述べさせていただきます。

外の音について全聾である者が作曲する場合には、絶対音感是不可欠である。なぜなら自分の脳裏に浮かんだ音の絶対音高がわからなければ、一音符たりとも楽譜上に書き込むことが出来ないからである。

ところで、そのような絶対音感（内的絶対音感と限定してもよいだろう）を持っている者が、だからといって相対音感（内的相対音感と限定しなくても、相対音感とは本来内的なもの）を持っていない、ということにならないことは、それこそバッハ、ベートーヴェン、モーツァルトを持ち出すまでもなく、明らかではなからうか？

また、もとより絶対音感と相対音感は、概念上、相互の否定関係はない。

したがって、楽器などで音の絶対音高を確かめることのできない立場の人間、全聾者が楽譜に音符を定着させる仕方作曲する場合、絶対音感が必要条件である。それは作曲の逐一の最終過程である、“実際に音符を五線上に書けるか書けないかを左右する。したがって、佐村河内守氏の「絶対音感を頼って作曲した」という言葉に、日野氏が指摘されることの胡散臭さはない。

なお、絶対音感+相対音感で十分条件と行かないことは、当たり前すぎる話である。

編集長より

日野氏は絶対音感が不要と言っている訳ではないでしょう。また SM 氏の音楽は純粹に古典的な調性音楽ではなく、色々なスタイルが混じっているので、絶対音感

必要でしょう。しかし SM 氏の「絶対音感に頼って作曲した」という宣伝から、「絶対音感が希有で万能な能力」と思い込む、素人の知ったかぶりが目につきます。

私は音大（某私立音大、および某国立の音大）でソルフェージュを教えた経験がかなり豊富にあります。ピアノ科など上級グレードのクラスの学生は殆ど絶対音感を持っています。つまり、聴いた音の絶対ピッチを即言い当てる事が出来ます。しかし、即興演奏、移調奏が出来る者は、ほんの僅かしかいません。例えば、へ長調で弾ける課題でも、嬰へ長調に移調するとなると、とたんに弾けなくなります。

それは、音のゲシュタルト(Gestalt<独>=形態)を把握する能力が弱いからです。例えば、某音大の上級グレードのクラスでバッハの h-moll のフーガの提示部が聴音の課題になったことがあります。学生のほぼ全員が絶対音感（ピアノの音については）を持っている筈で、さすがに大体は出来てはいるのですが、口音と嬰イを同時に書いたような答案もありました。つまり、音が縦に重なって聴こえていないのです。

耳が聴こえなくても書けるということは、頭の中に響いた、音の形態（旋律、和音、内声などのすべて）が同時に把握出来るということです。

つまり、聴音とは実際に楽器が鳴らした音を書き取ることですが、実際に鳴らした音ではなく、心に響いた音をすべて聴音出来るということでしょう。

前述したように、絶対音感を持つ上級クラスの学生でも、その殆どが音楽の形態を把握する力がかなり弱いのです。音楽の形態を把握する音感が相対音感です。

The image shows a musical score for a piano piece in 3/4 time, marked 'Adagio'. The score is divided into two sections, '形態 A' and '形態 B'. Both sections feature a melodic line in the right hand and a bass line in the left hand. The melodic line consists of a sequence of notes: G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5. The bass line consists of a sequence of notes: G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2, G2. The two sections are transpositions of each other, with '形態 B' being a higher transposition of '形態 A'. The notes are connected by a slur, and there are dynamic markings like 'f' and 'p'.

上の譜例の「形態 A」と「形態 B」は絶対音高は異なりますが、形態は同じです。つまり、しっかりした相対音感（形態を把握する能力）があれば、その形態を何調にでも移調できます。

例えば、「モーツァルトはひょっとすると絶対音感がなかったのではないか」という説もあります。それは、当時のオルガンは、教会によって基準ピッチがみんな異なっていたからです。私はモーツァルトが絶対音感を持たなかったという説については懐疑的ですが、彼はその時使われていた調律のピッチに、心のピッチを合わせる柔軟な感性を有していたのでしょう。少なくとも、モーツァルトが心に浮かんだ音全体を完全に心の耳で聴き取れている（聴音できている）ことは間違いありません。

<論より証拠を>

実は楽器に頼らず、心中の音から譜を起こすことと、全聾の人が譜を書くことでは「聴かないで書く」、「聴けないで書く」という違いがあるだけで条件は同じです。私は絶対音感を持たないとはいえませんが、その能力はかなり曖昧です。それでも、譜例に示された程度の調性スタイルでなら、楽器の音をまったく聴かずに、他の人達が監視する前で、自分の心に響いた音をすぐに楽譜化することが出来ます。あとで、それを音にしても、音楽的に不自然な響はしないように書けると思っています。実は、それほど複雑な音楽を作るのでなければ、古典的作曲技法をちゃんと学んだ者なら、誰でも多かれ少なかれそのような能力を備えているのではないのでしょうか。

<この応答を同時掲載した理由について>

ロクリアン正岡氏と、私との間でメールのやりとりをした後、ロクリアン氏から、以下のような趣旨のメールをいただきました。

「私の投稿を、あなたの文章ごと乗せるのも面白いと思うがどうですか？
読者に、作曲の舞台裏（その奥の深さ）をより知ってもらう機会にもなるのではないのでしょうか？」

私も氏の提案に同意しました。

我々音楽関係の人間には、一般の人々に対して音楽の現場について説明し、理解してもらおう努力が常々不足しているような気がします。あるジャーナリストが、耳が聴こえないで、どうやって作曲するのだと不思議がっていましたが、「聴こえないで書くこと」と「聴かないで書くこと」は実質的に同じ筈なのに、それさえ分かっていない、という気がしたからです。

本来なら、論争のやりとりは同月掲載にすべきではないのですが、「読者に作曲の舞台裏を判りやすく知ってもらう機会を与えよう」、というロクリアン氏の提案に賛同して、今回はこのような形をとらせてもらいました。

(編集長 中島洋一)

～初心者から専門家までの総合音楽院～

八王子音楽院

院長 広瀬美紀子

〒192-0046 八王子市明神町2-23-10

TEL:042-656-0312 FAX:042-656-2395

E-mail yasashiku12@yahoo.co.jp

URL <http://www.hachiouji-music.com>

★★開講コース★★

こどもの リトミック	ピアノ	ヴァイオリン チェロ・ビオラ	フルート クラリネット	オーボエ ファゴット
声楽 コーラス	ミュージカル 弾き語り	エレクトーン 作曲・アレンジ	ソルフェージュ	トランペット サクソ
クラシック ギター	ポピュラ部門 ジャズ部門	【ピアノ、ボーカル、 ドラム、ギター、ベース】		打楽器 (ボンゴ・マリンバ)
DTM (DTP・録音・ミキジク)	トロンボーン ハーモニカ	音大受験指導		ウッドベース (コントラバス)

"Fresh Concert"- CMDJ 2014 -

～より豊かな音楽の未来をめざして～

2014年4月10日(木) 18:30 開演

すみだトリフォニーホール 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

Fresh Concert は 2003年に第1回を開催し、本年で第10回目を迎えます。3年前の2011年3月11日に、我が国は東日本大震災、福島原発事故という未曾有の大災害、大事故に見舞われ、いまだに復興への道は険しいようです。被災者および関係者の方々には計り難いご苦労がおりでしょうが、頑張っていたいただきたいと思います。

幸いにして、2020年の東京オリンピックが決まり、そのイベントに向け、我が国の経済も徐々に上昇の兆しがみえてまいりました。しかし巨大な国政赤字を抱えた我が国では、文化関係の助成金などは減らされる傾向にあり、音楽界の活動環境はなかなか改善されません。そのような厳しい状況下であればこそ、若い才能を発掘、育成することも、長い歴史を重ねて来た音楽文化団体として果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、2003年以来、毎年3月下旬～4月上旬に『Fresh concert』を企画してまいりました。

12回目を迎える今回は、サクソフォン四重奏、およびピアノ四重奏のアンサンブルがあり、その他、声楽、ピアノ、チェロなど多彩な編成と演目で16人の若い音楽家達を世に送り出します。伴奏者を含めると21人の方々、このコンサートを目指して研鑽に励んでまいりました。

どうか、若い音楽家たちの奏でる音楽に耳を傾け、暖かい拍手を送って励ましてあげてください。また、その音楽が、聴きにきて下さった皆様方に、少しでも音楽の喜びと生きる活力を与えうるものとなったら、出演者およびスタッフ一同にとって、この上ない喜びであります。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深沢亮子
	理事長	北川暁子
	公演局長	北條直彦
	コンサート実行委員長	中島洋一(文責)

《プログラム》

千葉一喜 (Sop. Sax.) / 石田慎 (Alt. Sax.) / 岡田恵実 (Ten. Sax.) / 岩岡翔子 (Bar. Sax.)
マスランカ 「マウンテン・ロード」より (サクソフォーン四重奏)
D.Maslanka 「Mountain Roads」~ < Saxophone quartet >

池田 史花 (ソプラノ) ピアノ：伊藤 眞祐子
モーツァルト 歌劇『ドン・ジョヴァンニ』より
“もうお分かりですわね、誰が名誉を”
W.A. Mozart [Don Giovanni]~ “Or sai chi l'onore”
グノー 歌劇『ロミオとジュリエット』より “私は夢に生きたい”
C. Gounod [Roméo et Juliette]~ “Je Veux Vivre”

落合 真悟 (チェロ) ピアノ：井出 久美子
サン＝サーンス アレグロ・アパッショナート 作品 43
C. Saint-Saëns Allegro appassionato Op.43

宮城島 康 (バリトン) ピアノ：金森 大
ヴェルディ 歌劇『ドン カルロ』より “カルロよ、よく聞いて”
G.Verdi [Don Calros]~ “O Calro ascolta...”
ロッシニー 歌劇『セビリアの理髪師』より “私は町の何でも屋”
G.Rossini [Il Barbiere di Siviglia] ~ “Largo al factotum della citta”

稲垣 有芽乃 (ピアノ)
ラフマニノフ 楽興の時 作品 16 第 1、第 4 番
S. Rachmaninoff Moment Musical Op.16 No.1, 4

----- 休憩 -----

澤辺明音 (Pf.) / 廣瀬奈津美 (Vln.) / 松岡百合音 (Vla) / 石崎美雨 (Vc.)
メンデルスゾーン ピアノ四重奏曲 第 3 番 短調 作品 3 より 第 4 楽章
F. Mendelssohn Klavier Quartett Nr.3 h-moll Op.3~ 4.Satz

中川 香里 (メゾ・ソプラノ) ピアノ：松田 怜
R. シュトラウス 歌曲 “万霊節” 作品 10-8
R.Strauss “Allerseelen” Op.10-8
チャイコフスキー 歌劇 『オルレアンの少女』より “さらば森よ”
P.I.Tchaikovsky [Op.leanская Дева]~ “Да, час настал!”

山本 有紗 (ピアノ)
プロコフィエフ ソナタ 第 1 番 作品 1
S. Prokofiev Sonata No.1 op.1

宮地 江奈 (ソプラノ) ピアノ：藤川 志保
R. シュトラウス 歌曲 “アモール” 作品 第 68-5
R. Strauss “Amor” Op.68-5
マスネ 歌劇『マノン』より “私はどんな道でも”
J. Massenet [Manon]~ “Je marche sur tous les chemins”

三木 佑真 (テノール) ピアノ：藤川 志保
プッチーニ 歌劇『トスカ』より 1. “たえなる調和” 2. “星は光ぬ”
G.Puccini [Tosca]~ 1.“Recondita armonia” 2.“E lucevan le stelle”

司会：西山 淑子

【出演者略歴】

〈サクソフォン四重奏のメンバー〉

千葉 一喜 (ちば・かずき : ソプラノ・サクソフォン)

1991.03.13 生まれ。国立音楽大学演奏学科卒業、ソリストコース修了。

サクソフォンを小峰松太郎、下地啓二、雲井雅人各氏に、室内楽を雲井雅人、下地啓二、滝上典彦各氏に師事。2011年にケネス・チェ氏、2013年にラース・ムレクシュ氏のマスタークラスを受講。アーバン・サクソフォン・カルテット バリトン奏者。

マツダ・ミュージック・アカデミー 講師。
作曲科の学内発表演奏に数多く携わる他、成績優秀者による選抜演奏会である管打部会やソロ・室内楽定期演奏会等に出演。



左より千葉一喜 (Sop.) / 岩岡翔子 (Bar.)
岡田恵実 (Ten.) 石田慎 (Alt.)

石田 慎 (いしだ・まき : アルト・サクソフォン)

群馬県高崎市出身。これまでサクソフォンを黒沢香、下地啓二に師事。室内楽を雲井雅人、滝上典彦に師事。第23回日本クラシック音楽コンクールに於いて1位、3位なしの4位入賞。また、NewtideJazzOrchestraに所属しジャズ、クラシック共に活動。現在、国立音楽大学3年在学中。

岡田 恵実 (おかだ・えみ : テナー・サクソフォン)

愛知県出身、愛知県立明和高等学校音楽科卒業。サクソフォーンをこれまでに堀江裕介、雲井雅人の各氏に、室内楽を雲井雅人、滝上典彦、下地啓二の各氏に師事。2010年、ニコラ・プロスト氏のマスタークラスを受講。第11回大阪国際音楽コンクール入選。第14回ブルクハルト国際音楽コンクール室内楽部門奨励賞受賞。現在、国立音楽大学四年に在学し、管楽器ソリストコースを履修中。

岩岡 翔子 (いわおか・しょうこ : バリトン・サクソフォン)

常盤木学園 音楽科卒業。国立音楽大学四年在学中
これまでにサクソフォンを及川麻里、渡辺邦夫、下地啓二氏に師事。室内楽を滝上典彦、雲井雅人、下地啓二氏に師事。現在室内楽コース履修中。



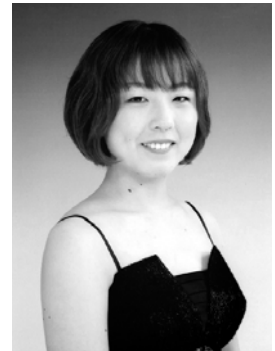
池田 史花 (いけだ・ふみか : ソプラノ)

東京都立川市出身。平成23年国立音楽大学演奏学科声楽専修を卒業。26年同大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻(オペラコース)を修了。同大学院オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』にフィオルディリージ役で出演。

声楽を岩崎由紀子、塩田美奈子、小林一男氏に師事。

伊藤 真祐子 (いとう・まゆこ：伴奏 ピアノ)

国立音楽大学附属高等学校を経て、国立音楽大学演奏学科鍵盤楽器専修(ピアノ)卒業。同大学大学院音楽研究科器楽専攻(伴奏コース)を修了。在学中、学内で催されたヴィルヘルム・ブロンズ氏、練木繁夫氏の特別レッスンを受ける。2009年、ポルトガルのオビドスにて行われた夏期国際マスタークラスにてパウル・バドゥーラ＝スコダ氏の薫陶を受けた。これまでにピアノを小島康史、故堀江孝子、今井顕の各氏に師事。室内楽を三木香代氏に、伴奏法を河原忠之氏に師事。



落合 真悟 (おちあい・しんご：チェロ)

5歳よりチェロをはじめ。植草ひろみ、安田謙一郎各氏に師事。早稲田大学本庄高等学院2年生。

井出 久美子 (いで・くみこ：伴奏 ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業後、日本 - ハンガリー友好協会の奨学生としてブダペストのリスト音楽院に留学。ピアノを田中希代子、コルネール・ゼンプレーニ、ジョルジュ・シェボック、室内楽を三善晃の各氏に師事。NHK「FMリサイタル」などの放送に出演。聖徳大学音楽学部講師。



宮城島 康 (みやぎしま・やすし：バリトン)

宮城県出身。国立音楽大学声楽科卒業、オペラソリストコースを修了。同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻(オペラコース)を修了。声楽を山下浩司、黒田博の各氏に師事。これまでに、国立音楽大学大学院オペラ「コジ ファン トウッテ」のグリエルモや、二期会研修所コンサート等に出演。

金森 大 (かなもり・だい：伴奏ピアノ)

略歴 1985年福岡県北九州市生まれ。5歳よりピアノを始める。国立音楽大学音楽学部音楽文化デザイン学科卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程器楽専攻(伴奏)を修了。修了後より、同大学院授業補助として勤務。これまでに高木美保、矢頭弥子、宮武きみえ、花岡千春の各氏に師事。声楽分野を中心に、近年では、米良美一氏や武蔵村山少年少女合唱団の専属伴奏など、幅広く活動を行っている。





稲垣 有芽乃 (いながき・ゆめの : ピアノ)

11年 第21回日本クラシックコンクール 入選

13年 第38回全国町田ピアノコンクール 入選

6歳よりピアノを始め、平成14年名古屋市立菊里高等学校音楽家卒業。
現在桐朋学園大学3年在学。

これまでに、酒井香代子、宇野恭子、北川暁子、有森直樹に師事。

.....
〈ピアノ四重奏のメンバー〉

澤辺 明音 (さわべ・あかね : ピアノ)

東京藝術大学附属音楽高等学校を経て同大学2年在学中。第60回全日本学生音楽コンクール東京大会小学校の部・第65回高校の部入選。第4回東関東ピアノコンクール上級部門最優秀賞。第5回エレナ・リヒテル国際ピアノコンクール高校生部門第1位。第55回東京国際芸術協会新人オーディションにて優秀新人賞を受賞し演奏会に出演。第23回「茨城の名手・名歌手たち」に出演。これまでに上仲典子、深澤亮子、有森博の各師に師事。



左より、澤辺明音 (P) / 廣瀬奈津実 (VI)
松岡百合音 (Vla) / 石崎美雨 (Vc)

廣瀬 奈津美 (ひろせ・なつみ : ヴァイオリン)

2005年 第51回 鎌倉市学生音楽コンクール 小学校高学年部門 優良賞。2007年 Legacy Violin Competition 中学校部門 銅賞。東京芸術大学附属音楽高等学校を経て、現在東京芸術大学2年に在学中。これまでに故 鷺見康朗氏、故 浅井万水美氏、山崎貴子氏、景山誠治氏、澤和樹氏に師事。

松岡 百合音 (まつおか・ゆりね : ヴィオラ)

10歳からヴァイオリンを始め、15歳でヴィオラに転向。東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、現在は東京芸術大学2年生。ヴィオラを市坪俊彦、臼木麻弥の各師に師事。

石崎 美雨 (いしざき・みう : チェロ)

8才よりチェロを始める。第65回全日本学生音楽コンクール 東京大会本選チェロ部門高校の部 奨励賞受賞。第12回泉の森ジュニアチェロコンクール 高校生以上の部 銀賞受賞。現在、東京芸術大学音楽学部2年在学中。山崎伸子、中田有、増本麻理各氏に師事。



中川 香里（なかがわ・かおり：メゾ・ソプラノ）

香川県出身。高松第一高等学校音楽科を卒業。国立音楽大学声楽専修を首席で卒業。同時に武岡賞を受賞。また同大学院修了。第82回読売新人演奏会出演。2012年国立音楽大学音楽研究所オペラ公演において、ニーノ・ロータ作曲、抒情劇『内気な二人』にリーザ役で出演。混声合唱団コーロ・ソフィア第11回定期演奏会 モーツァルトレクイエムソリスト。第2013年大学院オペラ公演『コジ・ファン・トゥッテ』にドラベッラ役で出演。現在、下原千恵子氏に師事。

松田 怜（まつだ・れい：伴奏ピアノ）

国立音楽大学附属高等学校作曲科を経て、同大学音楽学部演奏学科鍵盤楽器（ピアノ）専修卒業、同時に鍵盤楽器ソリスト・コースを修了。在学中、ダン・タイ・ソン、M・ベロフ、N・トゥルーリ、A・バックス各氏の特別レッスンを受講した他、第88回ソロ・室内楽コンサート、卒業演奏会に出演。第52回ニース夏季国際音楽アカデミーに参加。卒業時には石間奨学金を給付される。現在、同大学大学院修士課程器楽専攻（ピアノ）に在籍。これまでに、ピアノを菊池大成、奈良井巳城、小佐野圭、安井耕一の各氏に、作曲を山本康雄氏、指揮を大澤健一氏に師事



山本 有紗（やまもと・ありさ：ピアノ）

静岡県出身。国立音楽大学附属高校卒。2013年国立音楽大学演奏学科ピアノ専攻を首席で卒業。武岡賞受賞。ソリストコース修了。草野明子氏に師事。2010年ポーランドシレジアフィルハーモニー管弦楽団と共演。第12回日本演奏家コンクール入選。第28回JPTAピアノオーディション奨励賞。2011年ザルツブルグモーツァルトウム夏期国際音楽アカデミーにてセルジオ ペルティカローリ氏に師事しアカデミーコンサートに出演。同年秋 ゾリステンコンサートにて国立音楽大学オーケストラと共演。2012年 国外奨学生としてモーツァルトウム音楽院に短期留学、ディーナ ヨッフエ氏に師事しディプロマを取得。第90回ソロ・室内楽、コース修了、卒業演奏会等に多数出演。銀座音大フェスティバル2013に推薦される。第83回読売新人演奏会に出演。現在 国立音楽大学ソリスト上級アドヴァンストコースに在籍。ヤマハシステム講師。銀座ライオン専属ピアニスト。三島少年少女合唱隊ピアニスト。



宮地 江奈（みやち・えな：ソプラノ）

東京都出身。東洋英和女学院高等部卒業。国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽卒業、同時にオペラ・ソリストコース修了。同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻オペラコース修了。国立音楽大学学内選抜演奏会『Vocal Concert』（2011）『ソロ・室内楽定期演奏会～秋～』（2011）『卒業演奏会』（2012）『第82回読売新人演奏会』（2012）『東京新人演奏会』（2012）に出演。また、サントリー・ブルーローズホールにて日本経営クラブによる『JMC・コンサート』に出演。大学院修了時に、新人演奏会（2014）出演。

常に急き立てられるように音楽が進んでいく。最後にバッハのコラール「人はみな死すべきもの」を基にしたコラールが、それぞれの奏者をソロにとり、まるで丁寧に祈りを捧げるかのように4回繰り返される。

私にはこの山道が人生を表しているように思えてならない。

生誕の喜び、歩みを妨げる困難、頂上の間際を駆け上る喜び……。

終わりに、この難曲を演奏する機会をいただくことができ、大変ありがたく思います。

(千葉一喜 記)

※この作品については、資料が私の手許に無かったため、楽曲解説を出演者にお願ひしました。(中島)

モーツァルト 歌劇『ドン・ジョヴァンニ』より “もうお分かりですわね、誰が名誉を”

W.A. モーツァルト (1756~1791) が作曲したオペラの代表作の一つである『ドン・ジョヴァンニ』は、オペラ・ブッフアに分類されているが、一般的なオペラ・ブッフアとは内容的に大きく異なる作品である。また、このオペラには、真面目で揺るぎない心を持つドンナ・アンナ、恋に悶えて心が揺れるドンナ・エルヴィーラ、コケテッシュで浮気っぽいが要領がいいツェルリーナというように、性格の異なる三人の魅力的な女性が登場する。

“もうお分かりですわね、誰が名誉を” は第1幕第12場で、ドンナ・アンナがオッタヴィオに向かって、「私名誉を奪おうとした者、私から父を奪った者に復讐してください」とドン・ジョヴァンニへの制裁を要求するアンダンテニ長調 2/2拍子のアリア。ドンナ・アンナの強い意志が表れたアリアである。

グノー 歌劇『ロミオとジェリエット』より “私は夢に生きたい”

シャルル・グノー(1816-1893)は、生涯に10作に余るオペラを手がけているが、シュエクスピアの有名な戯曲を題材にしたこの作品は『ファウスト』に次いでよく知られた作品である。

“私は夢に生きたい” は、第一幕でジェリエットが乳母とともに、神父を訪ねて来て、ロメオへの愛を夢見て歌う華麗なアリアで、ファウストの「宝石の歌」とおなじく、ワルツで書かれている(ニ長調 3/4拍子)。このアリアはやはり、今回の出演者のような若い人に歌って欲しい曲である。

サン＝サーンス アレグロ・アパッショナート 作品43

シャルル・カミーユ・サン＝サーンス(1836-1921)は、同名の作品が2曲ある。チェロのために書かれたこの作品と、ピアノのために書かれた作品70である。

ロ短調 2/4拍子のこの作品は、展開部を持たない簡略なソナタ形式で書かれている。ピアノによる4小節の前奏の後、シンコペーションのリズムからなる軽快な第一主題がチェロで奏でられる。ニ長調の第二主題は、チェロの重音で始まれ16分音符音符が続く。簡潔にまとめられた作品だが、チェロの華麗な技法を巧みに取り入れ、楽器の魅力を引き出した佳作といえよう。この作品は管弦楽の伴奏で演奏される機会も多い。

ヴェルディ 歌劇『ドン カルロ』より “カルロよ、よく聞いて”

『ドン・カルロ』は、イタリア 19 世紀歌劇の巨星ジュセッペ・ヴェルディ (1813-1901) が 1865~1866 年に作曲したオペラで、その表現の深さにおいて傑作の名に値する作品である。この作品では、義母への愛に悩む王子カルロ、妻が息子を愛し自分を愛していないことを知り孤独に苛まれる国王フィリップ、ロドリーゴと王子の命がけの友情など私的な葛藤、それと宗教と政治、旧教と新教の対立という公的葛藤が重なり、彫りの深いドラマとなっている。

“カルロよ、よく聞いて” は、宗教裁判長に王に刃向かった罪なので死刑を宣告され、牢獄に幽閉されたカルロのところにロドリーゴが訪れ、王子を救うために全ての罪を自分が背負うように策をめぐらして来たと伝える。そしてフランドル (現在のオランダ、ベルギー地方) 救済を王子に託す。曲は嬰ハ短調から、変ニ長調 4/4 拍子に変わり、アリア“私の最後の日”を歌う。銃弾がロドリーゴを射貫き、彼は王子の腕の中で息絶える。

ロッシーニ 歌劇『セビリアの理髪師』より “私は町の何でも屋”

『セヴィリヤの理髪師』は、ジョアキーノ・ロッシーニ (1792-1868) 24 歳の年の作だが、彼のオペラ作品の中で、今でも最も上演回数が多い作品であろう。原作はポーマルシュの喜劇三部作 (「セヴィリヤの理髪師」、「フィガロの結婚」、「罪ある母」) の第 1 作にあたり、モーツァルトが作曲した「フィガロの結婚」は、この作品の後日談である。そして、この作品において、伯爵の恋人だったロジーナは、第 2 作では伯爵夫人となっている。

“私は町の何でも屋” ロジーナを慕う伯爵は、バルコニーの下で楽士たちのギター伴奏でカヴァティーナを歌うが、ロジーナは顔を見せない。すると「道を開けろ 町の何でも屋がお通りだ」と威勢良く歌いながらフィガロが登場する。(ハ長調 6/8 拍子) そしてフィガロは伯爵とロジーナの仲を取り持つ役を引き受ける。

ラフマニノフ 楽興の時 作品 16 第 1、第 4 番

自らも優れたピアニストであったセルゲイ・ラフマニノフ (1873-1943) は多くのピアノ作品を残しているが、6 曲からなる「楽興の時 作品 16」は 1896 年の 10 月~12 月に作曲されている。それぞれの楽曲は主題や雰囲気も異なり、独立した作品として、個別に演奏されることが多い。

第 1 番 アンダンティーノ 変口短調 4/4 1 小節の前奏の後、息の長い物憂い主題が登場し、変ニ長調を経て再び変口短調に戻ると、内声に二分音符の半音階下降形を伴うように変形される。コンモートと書かれた変ト長調の中間部では 7/4 拍子になり、拍子は変拍して行く、華麗なピアニズムに彩られた楽想が続いた後、最初の主題がアルペジオを伴い再現し、盛り上がった後、再弱奏で曲を閉じる。

第 4 番 プレスト 変口短調 4/4 第 1 曲とは対照的に六連符の 16 分音符で始まる急速でドラマチックな楽想を持つ曲である。無窮動のような左手のバス声部は半音階的に下降しており、それに導かれるように右手に八分音符で全音階的に下降する音型が現れる。そして激しい動きをともなったまま、最強奏の打鍵で曲を閉じる。

メンデルスゾーン ピアノ四重奏曲 第3番 口短調 作品3より 第4楽章

フェリックス・メンデルスゾーン (1809-0847) は、幼い頃から音楽の才を表し神童と讃えられたが、三曲残されたピアノ四重奏はいずれも10代前半の作品で、最後の第3番でさえ1825年1月18日に完成させているので、16才になる直前の作品である。しかし、すでに高い音楽的完成度を示している。この作品は4楽章で構成されているが、今回は時間の都合で最終楽章のアレグロ・ビヴァーチェ口短調：2/2拍子、のみ演奏する。

この楽章はソナタ形式で書かれている。弦楽器のトレモロによってピアノ上行するあaの動機を奏する。しばらくしてピアノがソロでリズムミクなaの動機を奏し弦楽器がそれを引き継ぐ。この楽章を通じてこの二つの動機が支配的である。第二主題はイ長調で表れる。展開部でもaとbの動機を中心に音楽が展開し、第一主題、第二主題の再現を経て、コーダではbの動機で音楽を盛り上げ終わる。頻繁に出現する付点のリズムが音楽に生氣を与え、メンデルスゾーンならではの華麗で軽やかな音楽を生み出している。

R. シュトラウス 歌曲 “万霊節” 作品10-8

リヒャルト・シュトラウス (1864-1949) は、オペラ、管弦楽曲など大規模の作品の他、歌曲も多く作曲している。“万霊節” は、ヘルマン・フォン・ギルムの詩による作品10の『8つの歌』の8番目の曲で、彼の21才時の作品である。4/4拍子 ピアノの静かな前奏で始まり、若い男が「香りの強いモクセイ草はテーブルの上において、年の最後の赤いアスターをこちらへ持ってきておくれ」と愛する人に語りかける。清純でナイーブな感情を表すこの歌曲は、現在でも演奏機会の多い、珠玉の作品となっている。

チャイコフスキー 歌劇 『オルレアンの少女』より “さらば森よ”

ロシアが生んだ大作曲家、ピョートル・チャイコフスキー (1840-1893) は、6つの交響曲やバレエ音楽で特に知られているが、数多くのオペラのオペラ作品を残している。『オルレアンの少女』、ジャンヌダルクの物語を題材にした作品で「エフゲニー・オネーギン」完成の翌年の1879年に作曲している。

“さらば森よ” は、第一幕でジャンヌダルクが歌うアリア。彼女は「さあ立ち上がる時が来た」と祖国フランスのために出陣を決意し、二短調2/2拍子で「さらば故郷の森や、畑よ」と故郷に別れを告げる。いたいけで清純な彼女の決意が、痛々しく、そして気高い心情が、聴く人の心に深く染みこんでくるアリアである。

プロコフィエフ ソナタ 第1番 作品1

セルゲイ・プロコフィエフ (1891-1953) は、ピアノソナタを8曲作曲しているが、第1番はまだ10代だった1909年の作品である。ハ短調8/12拍子で書かれたこの作品には、まだロマン派の影響が色濃く残っているが、すでに才能の萌芽を感じさせるところがある。

構成は一楽章形式のソナタ形式で書かれ、第一主題部は右手のピアノの和音と左手が半音階で下降する音型によるaの楽想と、音階的な旋律からなるbの楽想から成る。第二主題は定則通り、休符に続くシンコペーションを持って平行調(変イ長調)で表れる。平行調で終止すると、すぐ右手が下降する音型を奏で展開部に入る。テンポが遅くなり、アルペジオで主調のドミナントを奏し、bの楽想で再現部に入る。コーダではテンポを早めシンコペーションの楽想で盛り上がるが、最後はテンポを落とし、ffで堂々と曲を閉じる。

R. シュトラウス 歌曲 “アモール” 作品 第 68-5

アモール（愛）というタイトルのこの歌曲は 1918～1919 年に作曲されたクレメンス・ブレンターノの詩による「6つの歌」の5番目の曲で 1940 年に管弦楽伴奏に編曲されており、管弦楽版で演奏される機会も多い。ト長調 3/4 で書かれたこの曲は「炎のそばにその子は座っていたよアモール、アモール 目の見えない子供 小さな翼であおいでいるよ、」（藤井宏行氏の訳を引用）と天使アモール（キューピット）に語りかける詩となっているが、コロラトゥーラの技術を必要とする華やかな歌曲である。

マスネ 歌劇『マノン』より “私はどんな道でも”

《マノン（全5幕）》は、1884年に作曲され、ジュール・マスネ(1842-1912)のオペラ作家としての地位を確立させた傑作である。現代でもマスネ作品の中で最も上演回数が多い。原作はアベ・プレヴォによる「騎士デ・グリユーとマノンレスコーの物語」であるが、マスネはこの原作がとても気に入っていたようで、台本を自らアンリ・メイヤックに依頼したという逸話が残っている。なお、プッチーニも同じ題材を用いてオペラ《マノン・レスコー》を書いている。

第3幕 パリの遊歩道：さらに美しくなったマノンは「私はどんな道でも女王のように歩きます。みんな頭を下げ、私の手に口づけします。」と自信たっぷりに歌う。そして、「みんなの声が愛の言葉をささやくときそれに従いましょう」と言い、ガヴォットのリズムで、若さと恋の喜びを歌う。高い三点二音を含み、コロラトゥーラの技巧を要する曲であるが、自分の美貌を誇る驕慢なマノンの性格がよく表現されている。

プッチーニ 歌劇『トスカ』より 1. “たえなる調和” 2. “星は光ぬ”

歌姫トスカと画家カヴァラドッシとの悲劇的愛を描いた『トスカ』が、『ボエーム』、『蝶々夫人』と並ぶジャコモ・プッチーニ(1858-1924)がの三代傑作といわれていることはいまさら、説明するまでもなからう。この作品は 1899 年に完成し、初演は 1900 年 1 月 14 日、ローマのコスタンツィ劇場で行われている。

“たえなる調和” 第1幕でカヴァラドッシが絵を描くのをやめ、肖像の入ったメダルを取り出し「異なった美の秘めたる調和よ、私の愛するフローリア（トスカ）の色は褐色にと歌うへ蝶々6/8拍子のアリア。メロディーが美しく、美声のテノールなら、その声の魅力で聴衆を魅了できる名曲である。

“星は光ぬ” は第3幕で、カヴァラドッシが歌うアリア。脱獄した友人を匿った罪で捕らえられた彼は、看守に指輪を与え手紙を書く許しをえる。思い出に耽って歌う。（口短調、拍子は 3/4 だが時折 4/4 に変拍する）呟くように歌い始めるが、次第に感情が昂ぶって行き、歌い終わると、感情を抑えきれなくなり、顔を手で覆って泣き出す。カヴァラドッシの張り詰めた気持ちが伝わって来るような胸をうつアリアである。

COMPOSITIONS 2014

～ エレクトーンのための作品コンサート ～

◆ 白岩 優拓 (SHIRAIWA Masahiro)

BIRTH I-I (ZERO) ～マリンバと電子オルガンのための～ [改訂初演]
BIRTH I-I (ZERO) for Marimba and Electronic Organ

Marimba : 仲田 清志 (NAKADA Kiyoshi)
ELS-02X : 竹蓋 彩花 (TAKEFUTA Ayaka)

◆ 福地 奈津子 (FUKUCHI Natsuko)

電子オルガンのための小品「音の画集」より
I. Foreword [1996] V. 混沌とした... [1998] VII. 紫色のフォトグラフ [初演]
Collection of paintings for Electronic Organ's small works
I. Foreword V. Confused... VII. Purple photographs

ELS-01X : 福地 奈津子 (FUKUCHI Natsuko)

◆ 安彦 善博 (ABIKO Yoshihiro)

水の肖像 [2006]
Portrait of Water

ELS-01X : 山木 亜美 (YAMAKI Ami)

◆ 三宅 康弘 (MIYAKE Yasuhiro)

バベルの塔 - 電子オルガンのための [2004]
Tower of Babel for Electronic Organ

ELS-02X : 柿崎 俊也 (KAKIZAKI Toshiya)

◆ 菊地 雅春 (KIKUCHI Masaharu)

秋・TEMARI-UTA [1988 (改訂初演)]
Autumn・TEMARI-UTA

ELS-02X : 安藤 江利 (ANDOU Eri)

◆ 中嶋 恒雄 (NAKAJIMA Tsuneo)

ヴェネチア幻想 [改訂初演]
Fantasy for Venetia

ELS-02X : 大畑 莉紗 (OHATA Risa)

2014年6月27日(金) 19:00開演(18:30開場)

ヤマハエレクトーンシティ渋谷 メインスタジオ (渋谷駅より徒歩7分) 全自由席 2,500円

主催 : 日本音楽舞踊会議 公演企画部
(The Conference of Music and Dance, Japan)

協賛 : ヤマハエレクトーンシティ渋谷

後援 : 全日本電子楽器教育研究会
日本電子キーボード音楽学会
月刊『音楽の世界』

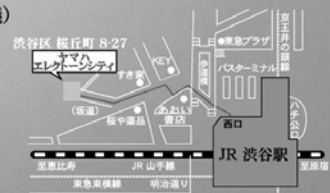
☎ 03-3369-7496 (日本音楽舞踊会議)

<http://cmdj1962.com/>
onbukai@mua.biglobe.ne.jp

03-3476-4700

(ヤマハエレクトーンシティ渋谷)

03-3955-6249 (西山)



Produced by 西山 淑子 福地 奈津子 ★ Designed by naccko

日本音楽舞踊会議 作曲部会公演

作曲部会 作品展

2014年5月26日（月）18:30 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 作曲部会／後援：月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

本日はお忙しいところ日本音楽舞踊会議（CMDJ）作曲部会作品展にご来場下さいまして有難うございます。

1962年に創立された日本音楽舞踊会議の中でも活発に活動して来た作曲部会会員の新作発表の場として、また旧作再演の場としてほぼ毎年開催しております。今回は特にテーマを設けず、出品者夫々の得意の分野の作品が上演されます。

どうぞ、最後までご鑑賞いただき、御高評を頂戴出来れば幸いです。

作曲部会長 高橋 通

出品者一同

《プログラム》

①金藤 豊 Yutaka KANETO

「芥川」 詩 在原業平

中嶋 啓子 (アルト) 篠塚 綾 (箏)

②古澤 彰 Akira FURUSAWA

「Mischief」

白井 彩和子 (フルート) / 井澤 裕介 (サクソフォン) / 大嶋 千暁 (ピアノ)

③橘川 琢 Migaku KITSUKAWA

「都市の肖像」第6集 2台ピアノによる《摩天楼組曲》op. 58 (初演)

1. Dawn (夜明け)
2. Skyscraper (摩天楼彷徨)
3. Twilight (黄昏)
4. Crossroad (交差点)

森川 あづさ (ピアノ)、佐藤 優介 (ピアノ)

休憩

④高橋 通 Toru TAKAHASHI

2台のピアノのための「窓」

栗栖 麻衣子、山下 早苗 (ピアノ)

⑤桑原洋明 Hiroaki KUWAHARA

「クラリネットとピアノのための三つの民謡」

- 1、奄美の子守唄
- 2、八木節
- 3、最上川舟歌

神田 恵美 (クラリネット) すずきみゆき (ピアノ)

⑥浅香 満 Mitsuru ASAKA

「3つの前奏曲」 Three Preludes

「みだれ髪」 MIDAREGAMI

稲葉 瑠奈 (ピアノ) Luna INABA (Piano)

⑦穴原 雅己 Masami ANAHARA

「島崎藤村の詩による3つの歌曲」

1. 潮音
2. 初恋
3. 明星 (初演)

佐藤 まどか (メゾソプラノ) 藤中 智香子 (ピアノ)

《曲目解説・出品者／演奏者プロフィール》

①金藤 豊 Yutaka KANETO 「芥川」 詩 在原業平

1. 芥川・2. 筒井筒・3. かきつばた。ずいぶん前に書いた作品であと2曲で全部で5曲の連作だが、その内3曲が初演である。 (金藤 豊)



【金藤 豊 (かねとう ゆたか)】

1931年 広島県尾道市生れ 広島通信講習所卒。1945年八月六日、疎開先の高田群向原町の寺の境内より広島への原爆投下を望見す。作曲を伊藤昇、清瀬保二、ビクトル・セアールに、クラシックギターを国藤和枝氏に師事。



【中嶋啓子 (なかじま けいこ) : アルト】

山梨大学教育学部音楽科卒業。片野坂栄子氏に師事。ミラノ音楽院に留学し、カルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで発声法を研究。1996年以降、中嶋恒雄歌曲作品のすべてを初演する。2012年にはチェコ、Festival Forfest 現代音楽祭に招待され、好評を博す。



【篠塚 綾 (しのづか あや) : 箏】

箏・三弦奏者。幼少より祖母に箏、三弦の手ほどきを、5歳よりピアノをはじめ。東京芸術大学邦楽科卒業、同大学院修了。NHK邦楽技能者育成会修了。第一回長江杯国際コンクール審査員特別賞受賞。国内外にてコンサート及び録音を行う他、洋楽器との共演など様々な演奏活動を展開している。森の会会員。

②古澤 彰 Akira FURUSAWA 「Mischief」

今回はピアノ、フルート、サクスの編成による新作の初演である。筆者は前年の6月に同じく、すみだトリフォニーホールにて日本音楽舞踊会議の作曲部の作品展にてピアノ、バイオリン、チェロの編成による新作を初演した。今回はその延長とも言える実験を試みるつもりである。フルートとサクスは特殊奏法を活かした演奏となる。また微分音も導入し、それらとピアノの十二音による伴奏の融合を目指した。去年のピアノトリオの楽曲でも弦楽器による微分音を効果的に用いたが、今回はあえて弦楽器よりも微分音を演奏しにくい管楽器の編成を選んだ。この編成によって微分音を演奏することで、音のゆらぎをより効果的に演出するつもりである。また前述の去年のピアノトリオの編成では弦楽器では重音を多用することで複雑な響きを狙ったが、今回は管楽器の為、逆に一音一音の響きをより重視することと、フルートとサクス特有の特殊奏法を積極的に導入することで、万華鏡のよ

うに場面によって表情の異なる楽曲を目指した。その掴みどころの無さを表現する為、タイトルを『Mischief』と名付けた。



【古澤 彰（ふるさわ あきら）】

これまでに作曲を鶴原勇夫、辻田幸徳、斎藤弘美、川島素晴、音響学を冨田勲、古山俊一、岩竹徹らの各氏に師事。器楽曲では室内楽を中心に国内外で新作の初演を行っている。電子音響ではマルチチャンネルによる立体音響の演奏活動を中心に活動。尚美学園大学・音楽表現学科を経て、現在は慶應義塾大学院・政策メディア研究科に在学。



【臼井 彩和子（うすい さわこ）：フルート】

15歳よりフルートを始める。香川県高松第一高等学校音楽科卒業。東京音楽大学を卒業し、現在同大学院一年在学中。これまでにフルートを辻村彩、砂山佳美、野口博司、細川順三の各氏に師事。室内楽を齋藤賀雄、内山洋、工藤重典、中野真理、安原理喜の各氏に師事。第61、62回全日本学生音楽コンクール大阪大会入選。第13回日本フルートコンベンション2007TOKYOコンクールアンサンブル部門・高校の部第2位。第31回全日本アンサンブルコンテスト全国大会・高校の部銀賞。平成23年度東京音楽大学ソロ・室内楽学内オーディション合格、合格者コンサートに木管五重奏で出演。2013年 第40回各大学より推薦されたフルーティストによるデビューリサイタルに出演。



【井澤 裕介（いざわ ゆうすけ）：サクソフォーン】

福岡県出身。尚美学園大学情報芸術学部音楽表現学科卒業。東京国際芸術協会の助成を受け、ウィーン国際音楽ゼミナールを受講。Kurt Schmid氏に師事。第6回横浜国際音楽コンクール室内楽一般の部、第2位入賞。学内オーディションに合格し、第10回尚美学園大学音楽表現学科定期演奏会にて尚美学園大学管弦楽団と共演する。第83回読売新人演奏会、第17回ヤマハ管楽器新人演奏会、第10回サクソフォーン新人演奏会に出演。第19回浜松国際管楽器アカデミーに参加し、Jean Yves Fourmeau氏に師事する。講師推薦プレミアムコンサートに出演。これまでにサクソフォーンを江口紀子・田中靖人・林田祐和・小串俊寿の各氏、室内楽を木村健雄・太田茂・小串俊寿の各氏に師事。現在東京音楽大学大学院在学中。



【大嶋 千暁（おおしま ちあき）：ピアノ】

第6回茨城県学生ピアノコンクール第2位。第1回東関東学生ピアノコンクール第3位。第17回ヤングアーティストコンクール連弾部門 最高位。第7回ブルクハルト国際音楽コンクール審査員賞。第13回日本アンサンブルコンクール 管・打楽器ピアノデュオ部門 優秀演奏者賞・アルソ出版社賞。阪神淡路大震災復興記念 第17回ソロ管楽器コンクール 伴奏賞・兵庫県教育委員会賞。第14回大阪国際音楽コンクール デュオ部門第1位・ジャーナリスト賞。アジア国際音楽コンクール2013 伴奏部門第2位。京成ホテルミラマーレ、音楽ビヤプラザ銀座ライオン 各メンバー。ピアノを鷺見加寿子・後藤美由紀、伴奏を山洞智に師事。東京音楽大学大学院伴奏科 科目等履修生修了。

③橘川 琢 Migaku KITSUKAWA

「都市の肖像」第6集 2台ピアノによる《摩天楼組曲》op. 58 (初演)

1. Dawn (夜明け) / 2. Skyscraper (摩天楼彷徨)
3. Twilight (黄昏) / 4. Crossroad (交差点)

筆者は2011年の冬のとある時期、約3ヶ月の間ほぼ毎日新宿の高層ビル街へ足を運んだ。好きな、新宿の摩天楼（高層ビル街）を見上げるのを日課としていたからである。その後、NewYork在住のクラリネット奏者Thomas Piercy氏と知己を得て、互いの都市にある摩天楼について、言葉で、そして作品を通じて語り合った。（そのThomas氏により本年2014年NewYorkで、他の拙作作品が演奏される。）

今回2台ピアノ作品ということで、2台ピアノならではのresonanceを生かしつつ、摩天楼への思いを込めて作曲された4曲をお届けする。全曲演奏で約13分。

1. Dawn (夜明け) : 黎明のビル街に新たな一日の光が広がる。
2. Skyscraper (摩天楼彷徨) : 刻一刻と変化してゆく、摩天楼の景色。激しい変化と動きのAllegroによる。
3. Twilight (黄昏) : 茜差し黄金色に輝く高層ビル街。薄青色の夜空。ビルの窓の明かりと光の河の、美しい夜景。都市や夜景の美とは、今ここで働いている人々の輝きでもある。
4. Crossroad (交差点) : 摩天楼の交差点。日々、無機的にせわしなく動く人々。赤信号で立ち止まるとき、ふと我に、自分に返ることもある。信号が青になり、気持ちも新たにそれぞれの目的地に向かって歩いてゆく。



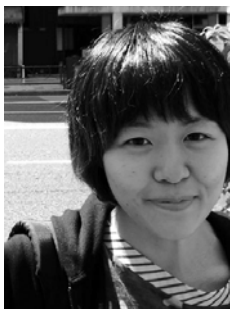
【橘川 琢 (きつかわ みがく)】

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。第2回牧野由多可賞作曲コンクールファイナリスト。文部科学省音楽療法専門士。平成17年(2005年)度(第60回記念)文化庁芸術祭参加。2006年・2008年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が、採択される。「新感覚抒情派(『音楽現代』誌)」と評される

抒情豊かな旋律と、日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。

日本音楽舞踊会議理事。月刊「音楽の世界」副編集長。詩と音楽を歌い、奏でる「トロッタの会」、「邦楽創造集団 Aura-J」Producer/Composer in residence。

Website: <http://www.migaku-k.net/>



【森川あずさ (もりかわ あずさ) : ピアノ】

1985年埼玉県生まれ。在住。都立芸術高校を経て、東京音楽大学演奏科コース卒業。2014年4月まで約10年間、パンクバンド『フジロック久(仮)』にキーボード担当として在籍。ヨーロッパ各地のスクワットでライブ、台湾での手作り感溢れるツアーなど、国内のみならず活動し、様々な価値観を知る。これらの経験をもとに、より豊かな音楽人生を目指してがんばります。



【佐藤 優介 (さとう ゆうすけ) : ピアノ】

1989年福島県浪江町生まれ、独学でピアノ、作曲を始める。高校卒業後、昭和音楽大学にて音楽プロデューサーの牧村憲一氏に師事。現在は作曲・編曲及びプロデュース業、演奏面でも活動を広げる。

④高橋 通 Toru TAKAHASHI 2台のピアノのための「窓」

第1曲「夜」夜が深まって行く。所々に見える灯りが少しずつ消えて行き、闇が濃くなる。そんな中に、どこか暖かいものを感じる。

第2曲「賑わい」(スウイング) 浮かれた気分が何処からか聞こえてくる。

第3曲「まどろみ」窓から差し込む柔らかい日差しの中で揺れている揺かご。幼子はどんな夢を見ているのだろう。

第4曲「朝日の輝き」窓を開ければ、波の音も聞こえてくる。朝の太陽がまぶしくなり始め、力強い陽光が海に煌めいている。

<窓>は内と外をつなぐ穴のようなもの。外界の様子が見える。内側の様子も見える。



【高橋 通(たかはし とおる)】

日本医科大学大学院卒業。医学博士。一絃琴を故山本游魚師、ピアノを故川村蔦子、作曲を田辺恒弥に師事。作曲の他、一絃琴の演奏家としても活動している。日本音楽舞踊会議正会員、(一般社)なみの会日本歌曲振興会会員に所属。幽意一絃琴鳴琴会を主宰。箏サマーコンサートの会代表。「すばるの会」代表。

主な作品：オペラ「竜宮から来た女房」、オペラ「伝説精進ガ池幻想」、尺八・二面の箏・十七絃のための四重奏曲、ヴァイオリンと箏の為のソナタ第2番、箏独奏ソナタ第11番、箏のための小協奏曲第2番<西からの風>など。



【栗栖麻衣子 (くりす まいこ) : ピアノ】

日本大学芸術学部音楽学科ピアノコース卒業。2001~2002年ウィーンにてヴィクトル・トイフルマイヤー、許裕安のもとピアノ演奏及び教育法について学ぶ。以後毎年渡欧しマスタークラス等でも研鑽を積む。第32回家永ピアノオーディション合格。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。ピアノソロ・デュオの他、声楽・器楽の伴奏でも活動している。黒川浩,大原裕子,深澤亮子各氏に師事。日本音楽舞踊会議会員。



【山下 早苗 (やました さなえ) : ピアノ】

東京都出身。3才よりピアノを始める。国立音楽大学付属高等学校を経て同大学卒業。2007年より「夜の会」演奏会に連続出演。2012年ヤマハエレクトーンシティにてエレクトーンオーケストラとラヴェルのコンチェルトを共演。音楽教室での発表会伴奏やエフゲニー・ザラフィアンツ氏マスタークラス受講など、現在も研鑽を積みながら後進の指導にあたっている。これまでにピアノを戸引小夜子、鹿島田章子、徳益公子の各氏に、声楽を宮永康生氏に師事。日本音楽舞踊会議会員。

⑤桑原洋明 Hiroaki KUWAHARA

「クラリネットとピアノのための三つの民謡」

1、奄美の子守唄 2、八木節 3、最上川舟歌

この曲は今から35年ほど前の作品です。子守唄は奄美本島の「泣かないよ坊ややよ」で、南国のそれではなく北国の感性を彷彿させる愛すべきメロディーです。それを聞きながら眠りに落ちた幼子は母の軟らかなかいなで夢に浸るという流れでしょうか。二曲目は栃木県の盆踊り唄、八木節で、小気味好いリズムと風刺の効いた歌詞は庶民のエネルギーをひしひしと感じます。

川幅広く、滔々と流れる最上川、帆に風を孕みながら小鵜飼舟は景観を愛でつつみな面を匍匐しながら穏やかに進みます、が一点俄に雲、風、剣呑と成り辻風は小舟を木の葉の如く翻弄します。やがて驟雨も止み、舟は河口を出て夕暮れの日本海にその帆をじょじょに沈めてゆきます。舟歌はそんなイメージでしょうか。

再演して頂いたお二人に感謝申し上げます。



【桑原 洋明（くわはら ひろあき）】

国立音楽大学作曲学科卒業。高田三郎、島岡 譲，外崎幹二に師事。管弦楽作品 津軽風土記。吹奏楽作品 三つの断章。弦楽作品 四つの民謡。室内楽作品 ピアノ三重奏曲「ある内なる対話」、ピアノ奏鳴曲「伊勢之海」、フルートとピアノのための組曲「日本の四季」、トロンボーン五重奏曲「厳粛なラルゴとアレグロモデラート」他。



【神田 恵美（かんだ えみ）：クラリネット】

愛知県出身。5歳よりピアノ、12歳よりクラリネットを始める。桐朋学園大学 音楽学部卒業。同大学研究科修了。クラリネットを堤淳喜、二宮和子に師事。室内楽を故・北爪利世、故・鈴木清三、浅野高瑛に師事。E. オッテンザマー氏の特別レッスンを受講。マリンバ・クラリネット・ピアノのトリオ、樹音～ジュネ～【jeu・ne】として活動。コンサートシリーズとして各地でコンサートを開催する。現在フリー奏者としてソロ、室内楽、オーケストラなどで演奏する傍ら、吹奏楽、オーケストラなど後進の指導にあたる。



【すずきみゆき：ピアノ】

1955年、岩手県宮古市に生まれる。3才よりピアノ・創作を始め、可憐な生物の住む自然界の弱肉強食のダイナミズムに心を動かされ表現活動が続いている。東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。在学中、冬休みを利用してモスクワに渡り、グネーシン音楽学校においてレオニード・オグリンチュク氏にピアノを師事する。

現在は、すずきミュージックで後進の指導に当たりながら、音楽団体や個人の音楽家、教育機関、地方自治体などの委嘱でライフワークの管弦楽を中心とした作曲や編曲、また、新曲初演のピアノ演奏を行っている。江戸川演奏家協会会員。江戸川区少年少女オーケストラ事務局次長。

⑥浅香 満 Mitsuru ASAKA

「3つの前奏曲」 Three Preludes / 「みだれ髪」 MIDAREGAMI

「3つの前奏曲」

1997年の作品です。社団法人日本ピアノ調律師協会青森ブロック会長の吉崎則夫氏からの委嘱により、それぞれ異なった調号による「12の前奏曲」を作曲し、同年、青森公立大学講堂に於いてE・アシュケナージ氏のピアノで初演されました。本日演奏されるのはその中の3曲です。

「みだれ髪」

2001年、音楽プロデューサーの斉藤恵美子さんより、与謝野晶子の革命的短歌集「みだれ髪」100周年を記念して、この作品の印象を基にしたピアノ曲の依頼をいただき、同年7月に脱稿しました。短歌の単なる音楽化ではなく、言葉から導き出され、その結晶である〈句〉の根底に漂う哀歎、情熱、情念、エロス、刹那、諦観、罪悪感、自己陶醉、自己嫌悪、更に信仰、道徳、常識、そしてそれらへの反発等の複雑な心のアラベスクを8つのごく短い音楽に纏めました。8曲とも短歌のように凝縮された瞬間の中に余韻の広がりを持つことを心がけたつもりです。

私が最も尊敬するピアニストの一人であり、華々しく活躍されている稲葉瑠奈さんが、拙作をどのように表現してくださるのか、期待しております。



【浅香満（あさか みつる）】

早稲田大学第一文学部中退。東京藝術大学作曲科卒業。同大学大学院修了。

これまでに、〈ヨーロッパ・アジア国際音楽祭〉（ロシア）、〈ヤノヴィエック国際音楽祭〉（ポーランド）はじめ、ルーマニア、ハワイ、イタリア、フィンランド、韓国等で開催された国際音楽祭に度々招かれ、作品は何れも大好評を博している。沖縄本土復帰20周年記念演奏会、ハビビ元インドネシア大統領歓迎演奏会等の委嘱を受けた他、故・本田

美奈子を始めとするアーティストのための編曲も数多く手掛ける。日本作曲家協議会、日本・ロシア音楽家協会、日本音楽舞踊会議各会員。



【稲葉瑠奈（いなば るな）：ピアノ】

東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。

作曲を鶴田睦男、ピアノを稲葉依子、御葉袋宣子、服部久美子、Ronald Cavaye、小林仁の各氏に師事。大学在学中の2002年、キングレコードよりデビューCD『ルス・デ・ラ・ルナ～月の光～』をリリース。翌年、CDアルバムと同タイトルのデビューリサイタルを東京文化会館にて実施。以来、国内外でのコンサート、音楽イベント等での演奏活動を行っている。

これまでに、和歌山コンクール1位、堺国際音楽コンクール1位、The 2003 World Piano Competition（米・シンシナティ）アーティスト部門入賞など、多数受賞歴がある。

また、「題名のない音楽会」などの音楽番組、「のだめカンタービレ」（学生時代の桃

平美奈子役)などのドラマにも出演。2011年に元アナウンサーの中西モナ(旧姓:山本モナ)、バイオリニストの重岡菜穂子と共に、トリオユニット「3Naccord」としても活動。セカンドアルバム「LOVE SONGS」は、iTunesにて配信中。様々なオムニバスCDもキングレコードより発売中。

⑦穴原 雅己 Masami ANAHARA

「島崎藤村の詩による3つの歌曲」

1. 潮音
2. 初恋
3. 明星(初演)

この3つの歌曲は、島崎藤村の処女詩集『若菜集』所収の詩(『藤村詩抄』より)によるもので、「潮音」は2005年、「初恋」は2006年の作曲です(いずれも、その後、若干手を加えています)。「明星」は昨年(2013年)の暮から今年(2014年)にかけて作曲した邦楽調の曲で、今回は初演となります。



【穴原 雅己(あなはら まさみ)】

群馬県生まれ。作曲を黒髪芳光、中島洋一の各氏に師事。作品には、管弦楽曲・室内楽曲・ピアノ曲・声楽曲などがある。「2003ひびけ野ばらコンサート」作曲募集(松本市)佳作、群馬県童謡作詞作曲家協会主催第10回及び11回童謡作曲コンテスト入賞。当会をはじめ、日本童謡協会主催の公演(童謡祭、こどものコーラス展)などでも作品を発表している。日本音楽舞踊会議会員、日本童謡協会会員。太田市役所勤務。



【佐藤 まどか(さとう まどか) : メゾ・ソプラノ】

国立音楽大学声楽科、同大学院オペラ科修了。二期会オペラスタジオ34期を優秀賞を受賞し修了。在学中に『フィガロの結婚』ケルビーノでオペラデビュー。『コシファントゥッテ』ドラベツラ、『魔笛』ダーム、『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼル、『ラインの黄金』フリッカ、他たくさんのおペラに出演。文化庁オペラ公演『小さな煙突掃除』サム、『カルメン』カルメンでは全国各地で公演し子供たちに歌声を届けている。コンサートでは『第九』『レクイエム』『メサイア』などのソリストを務め好評を得ている。また親善大使として日本アルゼンチン修好100周年記念演奏会に出演し、その好演は南米各地のメディアに大きく取り上げられた。豊かな声量と幅広い声域を生かしオペラ、日本歌曲、フランス歌曲、オペレッタ、タンゴなど多彩なレパートリーで活躍している。二期会会員。



【藤中 智香子(ふじなか ちかこ) : ピアノ】

武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを世川岬子、エーリッヒ・アンドレアス、オルガンを志村拓生の各氏に師事。第29回文化放送音楽賞入選。コンサート活動として、岬会、アンサンブル・シュゼット等出演。伴奏者としても、合唱団のほかに声楽家とのディオニソスコンサート等、多岐に渡って行っている。



会と会員の情報

CMDJ 会と会員のスケジュール

4 月

- 5(土)・6日(日) 高橋雅光：伊勢神宮「式年遷宮」での(公社)日本尺八連盟の奉納演奏式典に参加
- 6日(日)ピアノ部会試演会【10:00~13:00 戸引スタジオ】
ピアノ部会勉強会【13:00~ 戸引スタジオ】
楽曲、作曲解説は解説者、助川敏弥、北條直彦氏、
小崎幸子(プロコフィエフ・ソナタ第3番op. 28)
戸引小夜子(助川敏弥・山水図)
太田恵美子(フォーレ・ノクターン第6番op. 63)
聴講希望の方は戸引まで。090-2255-6181
- 7日(月)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00~21:00 事務所】
- 10日(木)フレッシュコンサート2014【すみだトリフォニー小ホール
(詳細については P.44 掲載の同コンサートプログラムを参照のこと)
- 12日(土)・(日)「春のしらべを合奏しよう」 山木七重会員出演
春のしらべを合奏しよう 和の響きを奏でる二日間集中シリーズ
はじめての箏曲【9:30~18:30 外苑キャンパス 受講料 33,500円
定員 40名 問い合わせ 0120-530-920 東京藝術学舎】
- 13日(日)『音楽の世界』臨時編集会議【14:00~16:00 事務所】
- 20日(日)並木桂子(pf.)ートリオで楽しむモーツァルト の調べ(仮題)
共演：印田千裕(Vn.)、印田洋介(Vc.)モーツァルト：ピアノトリオ ハ長調
k548、
ト短調k564。Vn. とPf. の爲の6つの変奏曲 ト短調k360他【光が丘美術館14:00
開演 主催・お問合せ：日本モーツァルト愛好会(代表 宮田宗雄)】
- 22日(火) 深沢亮子 モーツァルト：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ K. 304、
K. 378 共演 伊藤 維 (Vn)
【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター13:00
お問合せ：朝日カルチャーセンター 03-3344-1945】
- 26日(土) 島筒英夫・渡辺裕子・浦 富美
~島筒英夫歌曲集「蜂と神さま」出版記念コンサート~
共演 ギター：田嶋道生 歌：杵島純子・須田節子 ヴァイオリン：渡辺せいら
【すみだトリフォニー小ホール 14:00
大人 2,000円 高校生以下・障がい者 1,000円】

5 月

- 7日(水)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00~21:00 事務所】
- 9日(金) 佐藤光政・浅香五十鈴・吉仲京子会員参加、日本音楽舞踊会議後援
堀田健一氏支援コンサート~堀田氏の歩みに重ねて あの頃 こんなうた~
長崎の鐘・川の流れるように・人生の贈りもの 他
共演 歌：杵島純子・豊島正伸 ピアノ：富松万里子
【文京シビックホール・小ホール 14:00 開演 3000円】

- 16日(金) 『音楽の世界』編集会議 【19:00~21:00 事務所】
- 19日(月) 深沢亮子 Schubert の夕べ 共演 中村静香 (Vn) 毛利伯郎 (Vc)
即興曲 D. 935 より No2、No4 アルペジオーネ・ソナタ D. 821
ピアノ・トリオ No1 D. 809 【南麻布セントレホール 19:00】
- 26日(月) 作曲部会作品展 【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演】
詳細については P56 掲載の同コンサートプログラムを参照のこと

6 月

- 1日(日)ピアノ部会試演会 【10:00~13:00 戸引スタジオ】
- 7日(土)日本音楽舞踊会議 理事会 【19:00~21:00 事務所】
- 13日(金) 第27回ピアノ部会公演~華麗なる響宴 2014~
出演: 廣瀬史佳 上埜マユミ 小崎幸子 太田恵美子 深沢亮子 八木宏子
栗栖麻衣子 原口摩純 戸引小夜子 北川暁子
【オペラシティリサイタルホール 18:45 開演 全自由席 3500 円】
- 14日(土) 橋川琢:作曲 詩と音楽を歌い、奏でる「トロッタの会」第19回
La Nouvelle Chanson (op. 59) より「六月、今は遠く」(詩:木部与巴仁)
作曲:橋川琢 【早稲田奉仕園リバティホール】
- 15日(日) 芝田貞子・高橋順子 「第15回平和のためのコンサート」
講演:清水雅彦「国民の目・耳・口をふさぐ秘密保護法~その内容と狙い」
歌:狭間 壮 ピアノ:はざま ゆか 重唱:アンサンブル・ローゼ
めんこい仔馬・一本の鉛筆・花の街・歌の翼 他
【牛込笹笠区民ホール 18:30 開演 2200 円】
- 15日(日) 『音楽の世界』編集会議 【14:00~16:00 事務所】
- 27日(金) COMPOSITIONS 2014 【ヤマハエレクトーンシティ渋谷メインホール 19:00
開演 当日券 2,500 円】 チラシは本誌 P64 に掲載されています。
(連絡先:実行委員長 西山淑子 03-3955-6249)
- 28日(土) 助川敏弥:作曲 作品初演「Sunset」Violin 版初演
原曲は V'cello とピアノ版。今回は同一曲の violin とピアノ版の初演。
第45回アデカ富士通ジョイントコンサート。Violin 中野恵 ピアノ 船田桂子
【日暮里サニーホール、コンサート・サロン 14:00 開演】
- 30日(月) 深沢亮子 翔の会公開レッスン【お問合せ:044-966-5224 (大山喬子様
方) 10:00】

7 月

- 6日(日) 日本尺八連盟埼玉支部第37回定期演奏会
高橋雅光作曲 尺八・箏・十七絃による大合奏曲「筑後川詩情」(箏・十七絃=
柴田つぐみ社中) 【川越市メルトホール 14:00 開演 一般 3,000 円】
- 7日(月) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」
~昭和の幕あけ、思い出の歌たち&今では日本の歌となった世界の歌たち~
出演:佐藤光政・浅香五十鈴・内田暁子・浦 富美・高橋順子・
中村貴代・渡辺裕子 ピアノ:坂田晴美
【すみだトリフォニー小ホール 14:30 開演 2500 円(全自由席)】

9 月

- 12日(金) 深沢亮子 ウィーンの音楽家と共に
共演:C エーレンフェルナー (vn) H. ミュラー(va)他

【浜離宮朝日ホール 19:00 問い合わせ新演奏家(03-3561-5012)】

23日(火) 深沢亮子 千葉コンクール本選審査

25日(木) CMDJ2014 オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

10月

11日(土) 深沢亮子 公開レッスン 【瑞浪市 ホワイトスクエア 15:00】

12日(日) 深沢亮子コンサート【ホワイトスクエア 14:00 問い合わせ:0572-68-3143】

23日(木) 20世紀以降の音楽とその潮流 “様々な音の風景 XI”
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

11月

15日(土) 第28回ピアノ部会公演【原宿アコスタディオにて午後開催(詳細未定)】

出演者募集中。問い合わせ実行委員新井知子まで

21日(金) 「エレクトーン・オケによるコンチェルトの夕べ」

【渋谷・ヤマハ・エレクトーンシティ 19:00】

出演者募集中(戸引) 10分~15分の曲(自作も可)

12月

5日(金) 深沢亮子と室内楽の仲間達【音楽の友ホール 19:00 開演】

出演: 深沢亮子(pf) 恵藤久美子(vn) 中村静香(va) 安田謙一郎(vc)

演奏曲目と編成

助川敏弥 ピアノ三重奏曲(pf、vn、vc)

シューベルト アルペジオーネソナタ(va、pf)

モーツァルト ピアノ4重奏曲第一番(pf、vn、va、vc)

2015年

1月

16日(金) 声楽部会公演 「2015年新春に歌う~夢と希望と、そして・・・」

【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

3月

5日(木) 邦楽部会第2回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】 詳細未定

会員スケジュールの表示(凡例)について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催(含む、各部会主催)公演予定です。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

編集後記

3月の初頭は、寒い日が続きましたが、中旬以降急速に春めいた陽気となり、開花が遅れると予想された東京のソメイヨシノも3月25日に開花しました。4月に入ると消費税も上がり、その影響による経済の落ち込みも心配されますが、これからは、音楽活動の面でも花開く季節となります。

3月10日にその先駆けとなる邦楽部会発足記念コンサートが開催されました。今回のコンサートのように様々な流派の邦楽家が一堂に集まり、古典曲から現代曲まで演奏する催しが開催されることは、珍しいことです。今後の発展を期待したいと思います。そして4月10日には、第12回目となるフレッシュコンサートが開催されます。今年は例年にも増して粒よりの若い音楽家たちが参加しておりますので、聴き応えのあるコンサートとなるとと思います。若い人達の奏でる瑞々しい音楽を浴びて、そこから生気をもらい、春を元気に過ごしたいと思います。(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界4月号(通巻558号)

2014年4月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax: (03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします